

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

第五編相続法理由書原稿

(発行年 / Year)

1910

第五編 相續法理由書原稿

法典調查會

寫

第五編 相續

(理由) 相續法ノ編纂者ニ付テハ或ハ之ヲ特別
法トニテ制定シ或ハ之ヲ民法セキ典中ニ編入
スルモノアリト虽モ逝世諸國ノ立法主義ハ
概子後ノ編纂法ニ依ルモノニシテ固ヨリ至
當ノ主義タムベシ然レトミ民法法典中ニ於

ナハ相續法ノ位置ニ付テハ從來ノ立法例ハ

法典調査會

丸ノ之内ノ四種ニ分別スルコトヲ得一ハ即テ

相續ハ至トシテ親族關係ニ基リモナリト

ニテ相續ニ關スル規定ヲ以テ親族法中ニ編

入エニハ即テ相續ハ主トニテ所有權ヲ繼承

スルモノナリトニテ之ヲ物ニ關スルハ茲規定
ニ規定シ三ハ即テ相續ハ所有權其他財產

權、取得方法ナリトニテ云々財產取得ニ關
ス入法規中ニ編入ニ四ハ即ナ相續法ヲ以テ
特別ノ一編トニ之ヲ法典ノ最後ニ掲ギルモ
ノニシテ其理由トニ所人主トニテ相續ハ
財產ノ包括的取得ノ方法ナリト虽モ各人ノ
財產上及々親族上ノ關係ヲ明カナラニメ
外後ニ於テ先ニ人モナシハ相續法ハ北等
ノ關係ヲ規定スル諸法規ノ後ニ特別編トシ
テ掲ケルヲ以テ其舊ヲ得タムモノナリト云
フニ存ス而ニテ既成法典ハ右四種ノ立法主
義ノ中ニ於テ伊ミノ主義ニ従ヒ相續ハ即ケ
包括主義ノ財產取得ノ方法ナリトニテ之ヲ

財産取得編中之規定之特定名義ノ財產取得
ノ方法ニ關スル條章ニ次キテノリ
モ我國ニ於ケル相續ハ歐洲諸國ニ行ハルル
相続ノ如ク單純ナル財產相續ニ非スニテ別
ニ家督相續ナルモノヲ存ニ殊ニ家督相續ハ
本邦固有ノ風習トニテ財產相續ヨリ重セラ
ルルモノナシハ我國ニ於ケル相續ハ決シテ
之ヲ單純ナル財產取得ノ方法タルニ止ムル
ト解スベカラサルハ勿論ニシテ徒テ相續法
,範圍ハ財產相續以外ニ於テ家督相續ニ關
スル規定ヲ包含セサル(カラサルコトハ別
ニ辨明ヲ要ヤサル所トニ故ニ改或改或曲ハ相

續ニ肉入ル財產取得編第十三章ノ首節ニ於
テ先ツ家督相續ヲ規定シ遺產相續ニ關スル
規定ハ之ヲ次節ニ掲ケ家督相續ノ重ニスル
趣旨ヲ表明セルハ至當ノ立法主義ナリト虽
モ既ニ相續ハ家督相續ト財產相續トヲ包含
ニ決シテ單純ナル財產取得ノ方法タルニ止
マラサルコトヲ示セルニ拘ハリ又相續ニ關
スル規定ヲ以テ財產取得編十一章ト為シ
タハハ立法ノ本旨ニ悖リ編纂ノ體裁其宜ニ
キヲ得ケルモノトニシテトヨトヨ得ヌ斯ノカラ
我國ニ於ケル相續ハ家督相続ト財產相続ト
シ包含スルモノナレハ相續法ソシテ親族法

ノ一部又ルニ止マラシムルコトヲ得ニ又之

ヲ勵産茲中ニ編入シテ其當ヲ得ナリトキノ

コトヲ得ナルノミナラ人既ニ相續法ノ位置

ニ廻シテ説明シタル第図ノ三法至焉ノ如イ

相續ハ勵産上及ヒ親族上ノ關係ヲ明カナラ

シメタル後ニ於テ是ハベキモノナシハ本章

法典調査會

ハ相続法ヲ以テ独立ノ一編トニ民法ヲ典キ
ノ最後ニ之ヲ掲ケヌリ

改成法典ハ陸居家督相續、閑スル特別規定

ヲ相續茲中ニ掲ケ陸居ノ為ニ要件等ヲ規定

シト虽ニ陸居ノ法律上ノ性質ハ即ク戸主權

ヲ喪失スルニトニ存ニ亘結里トレニ相續シ

法典調査會

開始セニルニ至ハモリナシハ隱居其モノ
ニ閑スル規定ハ立ワ后主ニ閑スル親族諸ノ
條章中ニ掲ウルヲ以テ其當ヲ得タルモノト
ニ又既成法典ハ贈與及々遺贈ニ閑スル規定
シ一處ニ總括シ相續ニ閑スル規定ト相並ヒ
テ財産取得編ノ一章タニエント雖ニ贈與ノ
規定ハ既ニ公布セラレタハ民法第ニ編中ニ
編入セラレヌ遠贈ハ財産相續ノ原因ニシテ
相續法中ニ之ヲ規定スルハ至考ノ編纂法
九ニ用ノ本章ハ隱居家督相續ニ閑スル既成
法典ノ特別規定ノ相續編中ヨリ刪除セヒニ
及シ遺贈ニ閑スル規定ハ之ヲ本編中ニ掲ゲ

タリ 其他改或法典ハ相續ニ闇入ル財産取得
編第十三章ノ始メニ於テ其總則トニテ相續

ニハ家督相續ト遺產相續ノ二種アルコトヲ

明シト虽モ無用ノ條ミタルニ退キサヘリバ

テ本章ハ之ヲ刪除セリ而シテ相續編ノ總則

トシテ各種ノ相續ニ共通エベキ規定ヲ求ム

法典調査會

九ニ胎児ノ相續權ニ關スル規定ノ如キ一二

ノ條文フ存スハニ退キサハリ以テ本章ハ列

ニ相續編ノ終則ヲ設ケスシテ直クニ家督相

續ニ關スル規定ヲ掲ケ此規定ニシテ遺產相

續ニモ適用スルモノニ付テハ別ニ三つ通

用又ハ準用スル旨ノ規定ヲ設ケルコトナ

シ以テ編纂ノ體裁ヲ保タシメタリ

致人ノ相續人ノ同時死亡ノ場合ニ於ケル法律上ノ推定ニ關スル規定ハ佛國民法ヲ姑メトシテ二三ノ法典ハ之ヲ相續法ノ始メニ掲タル事ニ斯ノ如キ推定ハ實際ノ事實ニ適セサルコトタゞク此等ハ寧ロ証拠問題トシテ別

法典調査會

ニ法律ノ規定ヲ設ケサルヲ以テ妥當ト認ムルノミナラス英國ノ如平人罰段ノ規定ヲ設ケサルニテ致テ不徳ヲ感セサル事例ヲ承エテノナルハ本章ハ相續人ノ同時死亡ニ關レ罰ニ規定ヲ掲ケサルナリ

第一章 家督相續

(理由) 本章ハ既成法典財産取得編第十三章

第一節ニ相當スルモノニシテ既成法典ハ本

節第一款ニ於テ家督相継ニ關スル通則ト家

督相継人ノ資格ニ關スル規定トヲ乞載スト

虽モ本章ハ既成ノ整頓ト編纂ノ体裁ヲ保タ

ニ力為メニ本章第一節ニ於テ家督相継ノ總

則ヲ掲ケ次ニ第二節ニ於テ家督相継人ノ資

格ヲ規定ニ第三節ニ於テ家督相継人ノ順

位ヲ規定ニ就リニ第四節ニ於テ家督相継ノ

効力ヲ規定セリ而シテ隣居家督相継ニ關ス

ハ改成法典財產取得編第三百二條以下數條

ヲ刪除シタル理由ハ故ニ本編ノ族メハ説明

セニナレハ此ニ立ツ累々

第一節 總則

第九節 五十九條

(理由) 本條ハ家督相続開始ノ原因其時期及

ヒ相続開始ノ地ヲ指定スルモノニシテ既成
法典財産取得編第ニ百八十七條ハ家督相続

法典調査會

ノ定義ヲ掲ケ其原因ヲ示スニ止ムト至モ
是義ハ實際上甚少要ナキニ支シ家督相續開
始ノ時期ハ相續ノ承認及ヒ拠章等ニ關し種
々ノ關係ヲ有スルモノナレハ本條第一項ハ
相続開始ノ原因及ヒ其時期ヲ明カナフシム
ハモノトス而ヒテ既成法典ハ家督相續ノ原

因トシテ戸主ノ死亡又ハ隠匿ヲ現リムニ止

マルト虽ニ戸主カ国民籍ヲ失ミタシトキハ

戸主權ヲ喪失スベキコト當然ノ結果ニシテ

若ニ此者ノ家力單ニ左ノ戸主ノミナルトキ

ハ其家ハ廢家ト為ルベク又他ニ適嘗ト相続

人アルトキハ家督相続ハ此ニ開始シテ啟テ

法典調査會

一家ノ廢亡ヲ招クニ至ラサルヘシ故ニ戸主

國籍喪失シテ家督相続開始ノ一章因ト

爲スコト固ヨリ至當ノ規定ニシテ本章ハ即

チ本條第一号ニ於テ特ニ此趣旨ヲ明示スト

虽ニ國籍喪失ノ原因ノ如キハ特別法ニ依リ

テ規定セラルモノナレハ此ニ三ヲ掲ケ入

其他戸主ハ失踪ノ宣告ヲ度タルコトニ因リ
テ家督相続力開始スベキハ當坐ニシテ既成
法典ノ如ク失踪ノ宣告ニ附スルニ死亡ノ推
定タハ効力ヲ失テセサル以上ハ羣々戸主ノ
死亡ハ家督相続ノ原因ヨルコトヲ手スノミ
ニテハ失踪ノ宣告シ度ケルコトニ因リテ象

法典調査會

督相継ノ開始スルモノニ非ストノ解釈ヲ生
セシムベシト至ニ取ニ公布セラレタル民法
第三十一條ノ如ク失踪ノ宣告ハ死亡ノ推定
タハ効力ヲ有スルモノト為ス以上ハ戸主力
失踪ノ宣告ヲ失ケルニ因リテ家督相継力開
始スベキハ勿論ニシテ本稿第一號ニ掲クル

所ノ戸主ノ死亡ナル原因ナニハ所謂嫡得上
ノ死亡サル失踪ノ宣告ヲエ包金スヘキハ
解説上更ニ疑ク寔シサル所ト入

次ニ女戸主カ入夫婚姻ヲ為スエトニ因リテ
家督相續カ開帳入ヘコトニ付テハ既成法典
ニ別段ノ規定ナリ却テ人事物編第二百六十八

法典調査會

條ニ於テ入夫婚姻ノ場合ニ於テハ婚姻中入
夫人戸主ヲ代表ニテ其權ヲ行フト規定セル
ニ止マルヲ以テ別ニ家督相續ヲ開始セシメ
サルモノナリト解説セサルベカラヌ無レド
又入夫婚姻ニ因リテ女戸主カ戸主權ヲ失ヒ
入夫戸主ト為ニコトハ從未普通ニ行ハシ

タル慣習ナシト既ニ本業第七百三十四條ノ

規定ニ依リ女戸主力入夫婚姻ヲ為シタルト
キハ入夫ハ其家ノ戸主ト為ルコトヲ以テ通

則ト是又シテ因リ本業ノ立法主義ニ依レ

ハ女戸主ノ入夫婚姻ハ家督相續ノ一個ノ原
因タルコトヲ得ベキハ當坐ニシテニシケド我

法典調査會

國從來ノ慣習ニ適スルモノト謂フベシ故ニ

本業人本降牙ニ號ニ於テ女戸主ノ入夫婚姻

ニ因リ家督相續力闇始久ん旨シ助テスルニ

ノニシテ蓋シ当事者ノ意恩ニ因リ第7百3

十四條但書ノ規定ニ従ク入夫カ戸主ト為ラ

サルトキハ入夫婚姻ニ因リテ別ニ家督相續

、絶黒ヲ生セレメ サル人勿論ノ事トシベレ

本條第ニ項ハ 政國法典ニ其例ナシト虽モ 相

續開始ノ地力確是セ十九トヤハ 家督相續ニ

關ス人裁利管轄力不明了ナルニ因リ適當ノ

場所ヲ指定ミテ 相續開始ノ地ト認メタシニ

外ナラサルナリ

法典調査會

第九百七十條

(理由)

本條ハ 家督相續開後ノ請求權ニ關ス

ル特別時放ツ規定セリ蓋シ相續人種々ノ権

利義務ヲ包含スルモノナレハ其四復請求權

ノ如キ人通常時放ツ最長期間即テ相續開始

ノ時ヨリ二十九年ヲ経過シテんこ因リテ消滅

セレムハラ以テ通則ト為ササルベカラサル
か如シト雖モ家督相續ノ如キ一家一族ノ為
メ並ニ第三者ニ對シテ種々リ重大ナリ利害
關係ヲ有スル事項シテ承ク不確定ノ狀態
ニ存セシムニユトハ務メテ之ヲ避ケサヘベ
カラサルニ因リ苟ミ家督相續人又ハ其法定
代理人カ相續權侵害ノ事實ヲ知リタル以上
ハ達カニ其田復ラ請求ヒテ濫リニ不確定ノ
法律關係ニ存續セシメサンコトリ要ス是レ
即ナ本條ハ家督相續回復ノ請求權ニ付キ特
別賄效ノ期間リ定ム立ケ年ヲ以テ相當ト認
メスモノニシテ其起算日ハ即ナ家督相續

人又ハ甚茲定代理人力相續權侵害ノ事矣ラ
知リタル時ニ存ストレ其他相續開始ノ時ヨ

リニテ算ク經過ニ多ルトキト如何シ事情)

存スルニ拘ハリ又絶對的ニ右ノ請求權ヲ消滅セ

セムルナリ如キ人別ニ説明ヲ要セサルヘ

レ

第十九百七十一條

(理迪) 華族ノ家督相續ノ一概人民ノ家督相

續トハ頗ル其趣キシ置ニレ特別ノ法令ニ依

リテ規定セラルルコトヲ要スルモノサカラ

ス例ヘハ華族ノ戸主力致亡ハルトキハ其承

継人ニ繼レ特ニ家督相續ヲ仰存ケラルルカ

如キ手續アリ或ハ華族ノ家督相續ニ人爵其

他妻襲財產等ノ伴アカ如キ特別ノ關係アリ

ヲ以テ一般人民ノ家督相續ニ闇スル本章ノ

規定ハ華族ノ家督相續ニ之ヲ適用ストコト

ヲ得サルモノ少シトセ入是レ本條ノ明文ヲ
掲グル所以ニシテ固ヨリ至多ノ除外例ナル

ベニ

第二節 家督相續人ノ資格

第九而七十二條

(理由) 相續ニ關シテ胎児ヲ既生児ト見做ス

コトハ胎児ノ利益ヲ保護入ハ至當ノ方持ト
ルヲ以テ諸國ノ該典ハ概子此趣旨ヲ明示シ

我同從未ノ慣例ニ亦元ト異ナシコトナレ而
シテ既成法典ハ人事物編第ニ條ニ於テ胎兒ノ
利益ヲ保護スルニ付テハ胎兒ヲ江テ既生兒
ト見做スベキ概括的ノ原則ヲ掲ケタルニ因
リ相續ニ開シテ別ニ立ク及覆セサルカ如シ
ト虽モ既ニ發布セラレタハ新民法ハ古ニ述

法典調査會

フル如キ概括的ノ原則ハ實際ノ適用上往々
疑義ヲ生セレムルニ因リ實際ニ胎兒ノ利益ヲ
保護入ル必要アハ毎ニ明カニ此者ノ権利ヲ
認ムルノ正確ナルニ若カナルト信シ敵テ既
成法典ノ例ニ倣ハサリシテ因リ本葉ハ即チ
本條ニ依リテ胎兒ト虽モ家督相續ニ付テハ

既ニ生コレモノト看做入ベキ旨ヲ明ニ
ニ以テ法律保護ノ本旨ヲ全カラシメケリ
胎児入本條ナ一項ノ規定ニ因り家督相続人
タル資格ヲ保有入テト虽モ差レ胎児方死
耐ニテ生コレタルトキノ最初ヨリ特別ノ利
益ヲ達リルコト能ハサリシモノト認ムラム
ヘキハ固ヨリ至當ノ事ニ屬ス然レトモ二三
ノ立法例ニ依レハ出生ニシテ胎児カ引續キ
生存ユル力ヲ備フルニ非サレハ権利ヲ保有
エハコトヲ得ストスルニ及シ他ノ立法例ニ
係レヒ寧ニ死体ニテ生コレサンコトノミウ
必要トシ故テ引續キ生存エハカシ有スルヤ

否ヤク問ハサム力如レ而シテ前ノ立法例ハ

其通用上種乞ノ疑ヲ生エシルノナリ人

出生シタハ胎児ノ解力如何ニ因リテ其權利

能力ノ有無リ是ムル如キハ甚ク妄當ナラサ

ルニ因リ本革ハ後ノ立法例ニ倣フテ本條才

ニ現ノ規定ヲ設ケ胎児力死胎ニテ生マレタ

法典調査會

ルトキハ本條第一項ノ規定ヲ適用アサム旨

ヲ明カニセリ

第九百七十三條

理由 才條ハ家督相續人ノ扶養ニ關ルニ規

定ニシテ一方ニ於テハ既成法典財產取得編

第二百八十八條乃至第二百九十二條ニ刪正

ヲ加へ他ノ一方ニ於キハ德義上並ニ公益上
理由ニ基キ缺格者ノ範圍ヲ擴張セリ即チ
本條第一號ハ家督相續ノ性質ニ基ク缺格ノ
原因ニ之テ既成法典財產取得編第ニ百八十
八條乃至第ニ百九十一條ハ此點ニ關シ種々
規定ヲ設クト雖モ必竟一個ノ不則ノ適用
規定期限ト

法典調直會

ヲ示スニ非サレハ別ニ明文ヲ要セサリ規定
タルニ過キサハラ以テ本章ハ總テ三ヲ削除
シテ單ニ本條牙一號ノ本則ヲ示スニ止メト
リ然レトニ本家相續ノ必要上方家ノ法定ノ
推定家督相續人力本家ノ家督相續人ト為ル
コトハ從來普通ニ認ナシタル所ニシテ家

ヲ重シスル立法ノ本旨ニ適スルモノナレバ
本業ハ特ニ本條第一號但喜ノ規定ヲ設ケ以
テ既成法典ノ缺點ヲ補ヘリ

本條第二號ハ既成茲典財產取得編第ニ而九
十二條ト同一ノ趣旨ニ基シクト虽モ被害者
ノ範圍ヲ擴張シタシニ於テ之ニ修正ヲ加

法典調査會

ヘタリ蓋シ家業上家督相續人タウンカ為メ
ニ敢テ被相續人ニ害ヲ加ヘサルモ自己ノ先
順位ニ在人家督相續人ヲ死ニ致シ又ハ死ニ
致サニトスル者アルハ従ニ見ル所ニシテ斯
ノ如キ者ヲシテ家督相續人タラシムルユト
ハ何レノ黙ヨリ見ハモ次レテ許スベヤ限ニ非

サルヲ以テ本筆ハ左ノ犯罪者モ亦被相續人
ヲ死ニ致ニ又ハ死ニ致サシトシタル者ト同
シノ家督相續人タルコトヲ得サルモノト為
セリ

本條第3號乃至第6號ハ既成法典ニ其例ナ
シト虽ニ此ニ列挙スル者フレド尚ホ旦家督

法典調査會

相續人タルコトヲ得セシムハニ於ラハ德義
ニ及シ人情ニ悖ハリミナラス公私ノ利益ヲ
害シ保セテ犯罪ヲ誘引スル弊ナシトセフ故
ニ本筆ハ多數ノ立法例ニ倣フテ此等ノ規定
ヲ加ヘタハ又ノニシテ各本號ノ意義ニ有ア
ハ別ニ説明シ要セサルベシ

第三節 家督相續人ノ順位

第九百七十四條

(理由) 本條ハ既成法典財産取得編第二百九

十五條第一項ヲ補正ニテ家督相續人ノ法定
ノ順位ヲ定メタリ即キ本條第一項第一號乃
至第二號及之本五號ノ規定ハ總テ既成法典

法典調査會

ノ趣旨ニ従フモノナリト虽モ既成法典ハ嫡
出子又ノ女子ト私生子ミル男子トノ間ニ於
ケル順位ノ先後ヲ指定セサルニ因リ男子ハ
女子ニ先タツベキ通則ニ従ヒ私生子ト私
嫡出子タル女子ニ先タツベキカノ緩ク生セ
シムエトナシトセス然レトモ私生子ハ假

令男子タリトモ嫡出子ニ先タツコトヲ許サ

ザルハ殆ント聟明ヲ要セサ人所ナレハ本策

ハ特ニ本條牙一項第四号ノ規定ヲ加ヘ其趣

旨ヲ明カナリシメタリ而シテ嫡出子ト私生

子カ其親ノ人戸主ノ家ニ在リテ其間ニ家督

相続順位ノ關係ヲ生スル場合ハ戸主カ女子

法典調査會

タルトキニ限ルモノニシテ私生子ヲ既ニ男

戸主ノ家ニ在ルトキハ立シ庶子ノ人ベキニ

因リ戸主ノ家ニ在リテ嫡出子ト私生子ノ

家督相続順位ノ關係ヲ生スルコトナカルベ

シ

庶子カ之ヲ認知シタル父母ノ婚姻ニ因リ又

私生子カ其父母ノ婚姻中ノ認知ニ因リテ嫡
出子タル身分ヲ取得シ或ハ養子カ縁組ニ因
リテ嫡出子タル身分ヲ取得シタル場合ニ於
テハ此等ノ者カ往々自己ヨリ以前ノ嫡出子
ヨリ年長ナルコト多ク従テ年長者カ年少者
ニ先立ツキ通則ニ従ヒ年少ノ嫡出子カ家
督相続ノ順位ニ付キ既ニ享有シタル此者ノ
権利ヲ害スルモ尚ホ且ニニ先立ツキカノ
疑ラ生ヤシムニ足ル歟レトニ差レ罕シテ
斯ノ如クナレハ條理ニ反レ法得保護ノ本旨
ニ悖ルコト更ニ疑ナキ所ナレハ本章ハ特ニ
本條第ニ項ノ明文ヲ掲ケ法定ノ原因ニ由リ

テ訴ニ嫡出子タル身分ヲ取得シタシ翁ハ家督相續ニ付テハ嫡出子タル身分ヲ取得シタ

ル時ニ生マレタルモノト看做シ以テ他ノ嫡出子ノ利益ヲ保全スルモノニシテ改成法典ニ其例ナレト虽ニ立法ノ本旨ニ於テハ敵テ本業ト異ナランコトナカルベシ

第九節 七十立候

(理由) 本條ハ既成法典ニ其例ナキニ拘ム
ハ改得ノ家督相續權ヲ保護入ル為モニ特ニ
之ヲ設ケタリ蓋ニ第百三十九條及ニ第百七
百三十九條ノ規定ニ依リテ戸主ノ家ニ入り
タシ直至卑屬人即テ戸主ノ子ニシテ其家族

タル者ナレハ別段ノ定ナキ限ハ前條ノ通則
ニ従ヒ法是家督相續人トシテ相屬ノ姻姪ヲ
有ニベキハ當無ノ絃墨タルベシ此
等ノ者从元未他家ニ在リタシ有ナレハ新、
戸主ノ家ニ入ルニ先タチ其嫡出子又ハ庶子
タル他ノ直系卑属力改ヒ法是家督相続人ト
シテ其家ニ存スルニ拘ハリスミリ拂除シテ
新ニ家族ト為リタノ者ノ家督相續人タラシ
ムルコトハ條理ニ及スルノミナラスト本末戸
主ノ家ニ在リテ既ニ法是家督相續人ヌルニ
至卑属ノ権利ヲ奪ハんモノト云ハサルベカ
ラス是レ即チ本條ハ新ニ家族ト為リタノ血

至卑属ハ嫡出子又ハ庶子タル他ノ直至卑属
ナキ場合ニ限リ前條ニ定メタル頃序ニ従ヒ
法走家督相継人ト為ルコトヲ得キ旨ヲ明
カニシタル所以ナリ

第九百七十二條

〔理由〕推走家督相続人アル者ト虽モ婿養子

ヲ為ミ得ルコトハ既ニ第八百四十三條ノ明
示久ル所ニシテ推走家督相継人シ女子ニ
婚養子ヲ迎ヘタん場合ニ於テ婚養子カ相継
權ヲ受クベキハ當坐ノ事ニ屬スト虽モ推走
家督相継人ノ姉妹ニ迎ヘタハ婚養子ヲシテ
推走家督相継人ヲ排除シテ相継權ヲ受ケシ

ムルノ不條理ナルエトハ別ニ辨明ヲ要セス
然レトモ既ニ推定家督相継人アリ者ト虽モ
婿養子ヲ為ヌコトワ許シタル以上ハ推定家
督相継人ノ姉妹ノ為メニスル婿養子ハ推定
家督相継人ヲ排除エテ自ラ相継權ヲ受クヘ
キモノナルカワ疑ハシムルニ足ベシ之レ

本件ノ明文ヲ掲ケテ推定家督相継人ノ既得
ノ相継權ヲ保全スル所以ナリ

第九百七十七條

(理由) 家督相継ニ關ニテ嫡孫系祖ノ慣例ハ
從來普通ニ認メラレタル所ナレハ木室ニ既
成法典財產取得編第ニ百九十五條ヲニ復ト

同一、趣旨ニ基ニ水條ノ規定ヲ設ケルモノ
ニシテ只既成法典同項ノ明確ナリサん所ヲ
補正シタルニ過干ス

第九百七八十八條

(理由) 本條ハ所謂庶嫡ニ關スル規定ニシテ

既成法典財產取得編第ニ百九十六條、第ニ百

九十七條及ヒ才ニ而九十八條第一項ノ一部
ニ修正ヲ加ヘタリ蓋シ推定家督相続人ヲ廢
除スルコトハ一身一家ニ重要ナル關係ヲ有
スルモノナシハ廢除ノ原因タルニテ事由ハ
法律上三ツ豫定スルヲ以テ其當ヲ得ムンキ
ノト考スノミ十人裁判所ニテ廢嫡ノ理

由ヲ監定シテ其許をツ決セ、シケルコトハ推定家督相続人ノ権利ヲ保護ニ廢嫡ノ濫行ヲ豫防スルニ付キ適當ノ方法ト認ム。因ト既成法典ハ身分取扱更ニ申述シテ廢嫡ヲ為シ得ベキコトヲ認ムト虽モ本章ハ裁判所ニ其請求ヲ為スベキモノト改メタリ

法典調査會

既成法典ハ失踪ノ宣告ヲ以テ廢嫡ノ原因ト爲スト虽モ既ニ發布セラレタル新民法第三十一条ノ規定ニ依レハ失踪ノ宣告ハ死セノ推定タル効力ヲ有スルモノナシハ推定家督相続人ノ失踪ノ宣告ヲ更ケタル以上八殊至ニ廢嫡ノ争縁ヲ要セサン。ニ固ム。本章ハ既成

法典財產社得編第ニ百九十七條第一號ヲ刪

除セリ而レテ同條第ニ號ハ民衆上葉以產及

之準禁以產ヲ以テ廢嫡ノ原因ト為スト至モ

此等ノ宣告ヲ度ケタム有ハ高木能ト法走代

理人又ハ保佐人ノ保護ヲ得テ家督相續人々

ルニトヲ得ベキモノナレバ葉次產又ハ準禁

法產ヲ以テ廢嫡ノ原因ト認ムハコトハ

則ヒ安寄ナシサヘニ因リ本業ハ本條第ニ項

第ニ號及ヒ第四號ノ規定ヲ設ケ業際上推定

家督相續人カ家政ヲ執ルニ堪ヘサル心身ノ

狀況ニ在ハトキ又ハ浪費布トシテ準禁以產

ノ宣告ヲ產ケ改悛ノ望トキトキハ其廢除ヲ

請求スルコトヲ得ト改メタリ

次ニ既成法典ハ祖父母、父母ニ對スル罪ニ因

リテ列ニ處セラレタルコトヲ次ニテ廢嫡ノ原

因ト為スト雖ニ祖父母ニ對スル犯罪ニ因リ

テ相續權ヲ失ハシムルコトハ脚力衰キニ失

スト云ハサハカニサハニ及シ父母ニ對ス

ル更行ハ犯罪トニテ處刑セラルルニ非サレ

ハ廢嫡ノ原因タルニ至ラスト為スハ狹キニ

失エト云ハサハカニサハニ因リ本條第一

項第一號ハ被相續人ニ對シテ虐待ヲ為ニ又

ハ之ニ重大ナル侮辱ヲ加ヘタルコトヲ以テ

廢嫡ハ理由ト為セリ其他既成法典ハ重禁綱

一年以上、處刑及ヒ重罪ニ因レハ處刑ヲス
ニ廢嫡ノ原因ト為スト虽ニ畢竟斯ノ如キ處
刑ノ事實ヲ以テ廢嫡ノ原因ト為スコトハ主
トシテ此等ノ刑ヲ受ケタル者ヲシテ家督相
続ヲ為サシムルユトハ家名ヲ汚カスト云フ
ニ存スルモノナレハ本條ナ一項ナミ號ハ此
趣旨ヲ明白ナラシムル為メ家名ニ汚辱ヲ及
ホスヘキ罪ニ因リテ刑ニ處セラシタルコト
ヲユテ廢嫡ノ理由ト為シ得(キ旨ヲ明言シ
之ニ依リテ犯罪ノ性質ヲ限定スルト同時ニ
必スシニ刑罰ノ重キユトヲ要セサル趣旨ヲ
明カラシメタリ)

終りニ本條ヲニ現ツ設ケタル所以ハ元來推定家督相續人ヲ廢除スルコトハ重大ナハ事件タルニ因リ法律上豫ノ其原因タル事由ヲ指定スルコトヲ要スト雖モ實際上種々ノ事情ノ存スルアリテ本條第一項ニ列挙セル事由以外ノ原因ニ基キ廢嫡ヲ許ササルニカラ
サル場合ナシトセサレハナリ例ハ極メテ
貧困ナル家ノ推定家督相續人ヲ他家ニ收養シテ之ヲ教育セント欲入ル場合ノ如キハ廢嫡ノ上本人ヲシテ他家ニ入ルコトヲ得セレムルコトハ實際上有益且必要ニシニ從未ノ慣例ニ亦普通ニ斯ノ如キ廢嫡ノ理由ヲ認ム

ルモノトス既ニ本條亦ニ現ハ未一項ニ列舉
セハ東由以外ニ於テ正當ノ東由アルトキハ
被相護人ヲニテ靡嫡ノ請求ヲ為スコトヲ得
セシムト羅ニ溢リニシワ請求スルコト勿カ
テレムル為ヌ此場合ニ於テハ特ニ親族會ノ
認許ヲ要ケサル（カラサムモノト為セリ）

法典調査會

第九百七十九條

理由

遺言ヲステ靡嫡ノ意恩ヲ表アフルコ

トハ敵ヲニシテ禁スヘキハ別ハト呈モ既成法

典財產取扱緒第二百九十八條ナ一項ノ如ク

單ニ遺言書ヲ以テ靡嫡ヲ為スコトヲ得（キ

旨ヲ示スニ止ムルトキハ遺言力甚效力ヲ生

ハルト同時ニ廢嫡ノ效果ヲ生スルモノニレ
テ第ニ斯ノ妃ノナレハ本堂力既ニ前條ニ於
テ廢嫡ハ一身一家ニ重要ナル關係ヲ有スル
ニ因リ之ヲ為スニハ特ニ裁判所ニ請求スル
ニトヲ要ニタル趣旨ニ牴觸スルモノト云ハ
サルベカラス故ニ本條ハ彼相續人カ遺言ヲ
以テ廢嫡ノ意恩ヲ表示シタルトキハ遺言ノ
效力發生ノ後遺言執行有ハ連帶ナリ廢嫡ノ
請求ヲ裁判所ニ為スベキモノトレ立法ノ本
旨ヲ貫徹セシメタリ

第九百八十條

(理由) 本條ハ廢嫡ノ取扱ニ關スル規定ニシ

テ既成法典財産取得編第二百九十八條第二項及ヒ第三項ニ修正ヲ加ヘタリ即チ既成法典カ廢嫡ノ取消ヲ為スニハ身分取扱更ニ申述スハヲ以テ足ルト為スト虽ミ本案ハ既ニ裁判所ニ請求シテ廢嫡ス(キミ)ノト為シタルニ因リ其取消スニ至ラ裁判所ニ請求ス(キモノト為ヘリ而シテ本案ノ時ニ本條第ニ項ノ規定ヲ加ヘタル所以ハ帝十九昭七十八條第
一號ノ場合ニ於テハ廢嫡ノ厚因ヲハ推定家督相續人ノ惡行ハ罪ニ被相續人ノ身上ニ關係ヲ有スルニ止ムモノナレハ被相続人ニ於テ之ヲ宥恕スル以上ハ何時ニテモ相續權

ヲ曲復スルエトヲ得セ之ムルヲ以テ至焉ト

為スベリ廢嫡ノ原因ヲ推定家督相続人一身

上ニ存スル場合ト其趣フ異ニスレハナリ

其他既成経典ハ遺言ヲ以テ廢嫡ノ取消ヲ為
スコトヲ認メサル方如シト虽ミ實際上ニ於
テハ彼相続人カ死セリノ際ニ廢嫡ノ取消ヲ為

スコト多カルベリ又其事由ヲ制限スル理由
ナキヲ以テ本接ハ遺言ヲ以テ廢嫡ノ取消ヲ
為スコトヲ認メ此場合ニ於シハ遺言執行有
ケシテ廢嫡ノ遺言ニ關スルト公一ノ手續ニ
從ハシムルヲ以テ至焉ト認(4ん)本條
中三項ハ即テ廢嫡ノ取消ニ付シハ前條ノ根

定の準用スヽキモノト為セリ

第九百八十一條

(理由) 本章ハ既ニ被相續人カ直ナニ廢嫡ノ

請求ヲ為スト遺言ヲ以テ廢嫡ノ意旨ヲ表示スルトヲ問ハス總テ裁判所ノ認許ヲ受ケバキモノト為エタルニ因リ被相續人カ廢嫡ノ

請求ヲ為エタん後裁判確前ニ死亡ニ成ハ達

言執行者力為エタん廢嫡ノ請求ニ對シテ

未ク裁判力確定ヤサムトキハ其間何人力戸

主權ヲ行使スベキカ又被相續人ノ遺産ハ如

何ニ立ク取扱フベキカ、何キ法得上豫ノ適

當ノ處置ヲ指定スルコトヲ要ニ是し印ナ特

ニ本條規定ヲ設ケル所以ニシテ本業ハ左ノ

場合ニ於テ人情ニ不在者ノ財産管理ニ關ス

ハ場合ノ如ク裁判所ヲシテ親族利害關係人

又ハ権利ノ請求ニ因リ戸主権ノ行使及ヒ遺

産ノ管理ニ付キ必要ナル處勿ラ余ベニカル

ヲユテ至當ノ方法ト認メタリ蓋シ本條ノ規

法典調査會

是ハ既成法典ニ存セサル所ナリト虽モ之シ

既成法典ニ於テハ單ニ身命取扱更ニ申述シ

ニ直キニ麻煩ヲ為シ或ハ遺言ノ効力發生ト

同時ニ麻煩ノ効果ヲ生セシムニ因リ本條

ノ必要ヲ感セサリニシテ因ルノミ

其他本條ナ一項ノ規定ニ因リ遺産管理人力

選任セラルベ中ハ尙然ニシテ此場合ニ於テ

ハ左ノ管理人ニ付テモ亦不在省ノ財産管理
人ニ就入ル如ク通商ノ監督方法ヲ定メ權限
ノ範圍ヲ指定シ其他相當ノ擔保ヲ供セシム
ルコトヲ要スルニ因リ本掌ハ特ニ本條第二
項ノ規定ヲ設ケ第一項ノ場合ニ於テハ不在

法典調査會

者ノ財產管理ニ關スル第二十七條乃至第二
十九條ノ規定ヲ準用ス(キモノト為セ)

第九百八十二條

(理由) 本條ハ家督相續人ノ指定及ヒ其取消

ニ關スル規定ニシテ既成法典財產取得編第
二百九十九條ニ修正フ加ヘタリ即チ改成法

典ハ家督相続人ヲ指定スルコトヲ得ヘキ本

則ヲ前提シテ法文上ニハ却リ之ヲ許ササル

場合ヲ規定スト虽モ聊カ仲裁ヲ失スルノニ

ナラス家督相続人ヲ指定スルコトヲ得んヤ

否ヤハ既ニ法律ノ明文ヲ要スベキ事ナルニ

因リ本章ハ本條第一項ニ於テ寛クル法律上ノ

本條ヲ掲ケ法定ノ推定家督相続人ナキトキ
ニ限り被相續人ハ家督相続人ヲ指定スルコ
トヲ得キ肯シ明カニセリ然レトモ既成法
典同條但書ノ趣ノ如ク本條ニ違ヒタル指定
ト虽モ被相續人ノ死亡ノ日ニ法定家督相續
人アラサルトキ人有效ト為ニヘキ旨シ明ニ

セルハ既レト疑フ若レサル所シムリ以テ本

條ハ三ツ刪院セリ

家督相続人ノ指定ハ單獨行為ナルヲ以テ被
相続人ハ隨意ニ之ヲ取消エコトヲ得サんべ
カラバ然レトモ被指定者力指定ニ應シテ能
該ノ意思ヲ表示シトハ後ト虽モ在ノ指定シ
取消スコトヲ得ルヤ否ヤニ有キ疑ナリトセ
ス而レテ被指定者力一旦指定ニ應シタし以
上ハ假令此者シニテ家督相続ヲ為サレハシ
エトヲ得サル正當ノ事由アルモ其ノ指定シ
取消スコトヲ得ヌトビハ實際上不當ノ結果
ヲ生セレムシノミナラス取ニ法定ノ推定家

督相続人ト虽モ三ツ廢除スルコトヲ得ベキ
旨ヲ認メシん立派ノ趣旨ニ抵触スベシ故ニ

本業ハ特ニ本條第ニ項ノ規定ヲ設ケ家督相
続人ノ指定ハ之ヲ取消スコトヲ得ヘキ旨ヲ

明カニセリ

第九百八十三條

理由 本條ハ家督相続人ノ指定及々取消ノ
効力發生ノ時期ヲ規定スルモノニシテ既成
法典ニ其例ナシト虽モ此事シシナ一身一家
ニ重要ナシ關係リ有スルモノナレバ左ノ効
力發生ノ時期ハ務メテ列挙タラシム人コト
ヲ要ス之ニ本業ハ隠尾、婚姻等ノ效力發生ノ

時期ニ関スル例ニ從ヒ本條ノ規定ヲ設ケタ
ル所以ナリ

第九百八十四條

(理由) 改成法典財産取得編第三百條ハ遺言
書ノ以テスルノ外普通ノ意思表示ニ依リテ
家督相続人ヲ指定スルコトヲ許サスト雖モ

斯ノ如キ制限ヲ設クルコトハ其必要ナキノ

ニナラ入實際上甚シ不便ヲ感セシムベリ然

ニ本章ノ如ク家督相続人ヲ指定及ヒ其取消

ハ古籍史ニ届出ワルニ因リテ其効力ヲ生ス

ト為スニ於テ人普通ノ意思表示ニ依リテ之

ヲ為サニシムモ敢テ禁憲ヲ生スルコトナカ

ルベニ其他既成法典ハ單ニ家督相續人ノ指定ニ付テノミ其方式ヲ定メ指定期限ノ取消ニ付

キ之ヲ定メサルハ本章ノ主義ト相対レサル所トス既ニ本章ハ家督相續人ノ指定及ヒ其取消ハ共ニ普通ノ意思表示ニ依リテ之ヲ為入エトヲ得ルヲ本則トニ此種ニ付テハ別ニ

法典調査會

明文ヲ要セサルヲ因リ本條ニ於テハ寧ニ遺言ヲ以テモ家督相續人ノ指定又ハ其取消ヲ為スユトヲ得ベキ旨ヲ明カニセリ而ニテ此場合ニ於テ遺言ノ効力が發生スルト同時ニ右ノ指定又ハ其取消ガ効力ヲ生スルニ形ニシテ遺言執行者ノ扁書ニ因リテ之ヲ生セし

ハルストノ至當十八ハ他ノ場合トノ權衡上
既ニ明白ナシハ本條ハ即チ遺言執行者ニ對
シ家督相續人ノ指定又ハ其取消ヲ包含セル
遺言力効力ヲ生ニタルトキハ遲滞ナク之ヲ
届出ツベキ義務ヲ負ハシメタリ

第九百八十五條

(理由) 本條ハ家督相續人ノ選定ニ關スル規
定ニシテ既成法典財產取得編第三百一條及
ヒ第三百二條ニ相當入只本章ノ入夫又ハ婿
養子ナリシ被相続人ノ配偶充ニ限りテ之ヲ
第一順位ニ置キタル所以ハ主トシテ家ヲ重
シシ其血統ヲ承継セシモサラントスル趣旨

ニ基リモノニシテ固ヨリ至当ノ修正リルベ

ニ其他既成法典ハ兄弟姉妹ノ卑属親中ヨリ
家督相續人ヲ選定ハ其場合ニ有ナ細則ヲ指
定スト虽モ既ニ斯ノ如キ家族中ヨリ家督相

續人ヲ求ムハ場合ニ依リハ第ニ其中ニ就テ
廣う適當ノ者ヲ選フコトヲ得セシムンヲ以
テ

法典調査會

ニ實際ノ事情ニ適スルモノト認ムハニ因リ
本章ハ不條第ニ號ニ於テ單ニ兄弟姉妹ノ直
系卑属中ヨリ選定入ヘキ旨ヲ示エニ止メタ
リ

第九而八十二條

(理由) 家督相續人選定ノ場合ニ於ケル配偶

者兄弟姉妹又ハ其直系卑屬ノ相續順位ハ之
ヲ變更スルコトヲ得ル力又ハ法定又ハ指定
家督相續人ナキトキ人右^如述ブル者ノ中ヨリ
リ必ス家督相續人ヲ選定セサルベカラザル
カニ何^テハ既成法典ハ法走ノ順序^ニ違ハズ
エテ必ス選定セサルベカラスト為スモノメ
ルコトハ同財產取得編第三百一條及^ヒ第三
百二條ノ規定ニ従^ヒテ殆ニト疑ナキ力如レ
然レトモ古ニ列挙スル者ハ元未被相續人ノ
直系卑屬ノ如ク法律上^ニ列^ヒ相續權リ有スル
モノニ非^ク且從末ノ慣例^ニ依ルニ此等ノ有
タニテ家督相續ヲ為サシムンコトハ絶テ觀

法典調査會

族ノ協議ニ任カレタハモリニシテ假令家督
相續人ナキ場合ト虽モ必スニモ本ニ列挙入
ル者ノ中ヨリ之ヲ選定セザルニカラバト為
シタルモノニ非ス従テ此等ノ者ノ間ニ於ケ
ル家督相續ノ順位ノ如キニ致テ之ヲ一覽セ
シニ非エシヲ只行政上ノ便宜ノ為メ漸々相
富ノ順位ヲ認ムニ至リタルノミ故ニ本京
ハ既ニ前條ニ於テ法律上ノ通則トニテ法定
又ハ指定ノ家督相續人ナキ場合ニ樹ニ家督
相續人ノ選定ニ付キ相当ノ範囲及ニ一般ノ
順序ヲ指定スト虽元之ヲ以テ命令的ノ規定
ト為サヌニテ特ニ本條ノ例外ヲ設ケ家督相

縁人ノ選定スル権利ヲ有スル事ハ右ノ順序

フ変更シ又ハ選定ヲ為ササンユトフ得ヘキ

旨ヲ認メ之ニ依リテ實際ノ事情ト従来ノ慣

例ニ通セシムタリ但レトモ選定権ヲ有スル

者力溢リニ本條ノ権利ヲ行使シトキハ既

ニ家督相続人ノ選定ノ範囲及ニ其順序ヲ指

定シタル立法ノ本旨ニ悖ルヲ以テ本条ハ承
継ノ権利ヲ行使スルニ付テハ正當ノ事由ノ
存スルコト及ニ裁判所ノ許可ヲ受クルコト
ヲ必要ト為セリ

第九回 八十七勝

(理由) 本條ハ被相続人ノ入夫又ハ培養子ニ

非サル場合ニ於ケル其配偶者及く彼相續人

ノ家ニ在ル直至尊屬ノ家督相續ノ順位ニ關

スル規定ニシテ既成法典財産取得綱

トゾハト同様ノ趣旨ニ從フモノノ

トエ蓋シ配偶者又ハ直至尊屬ノ家督相續ヲ
為スハ賜ル里例ニ屬スト虽モ既ニ一千九百八

十五條ニ於テ主トニテ家ヲ重ニスル趣旨ニ
基キ被相續人カ入夫又ハ婚養子ナル場合ニ
於ケル家督相續ニ有ラハ其配偶者ヲニテ兄
弟姉妹等ニ先ナリ第一順位ヲ保クシメタルモ
ノニシテ假令被相續人カ入夫又ハ婚養子ニ

非サル場合ト異モ第九而八十之條ノ規定ニ

依リテ家督相継人ノル者ナキハ被相継人ノ

配偶名ヲシテ家督統相ヲ為サレシムコトハ

一船ノ人情ニ通ヒ且從未ノ慣例ニモ左ツモ

ノト謂ウサンベカラス故ニ本條ハ弐九而八

十九條第一節ニ該考セサル配偶系ト第モ同

條ノ規定ニ依リテ家督相継人ノル者ナキト

キハ他ノ者ニ先テ家督相継ヲ為スコトヲ得

セシムモノニシテ此配偶者ミナキトキニ

及ヒ被相継人ノ家ニ在ル直至尊屬ヲシテ相

縁順位ニ立スシムモノトス而シテ此直系

尊屬ノ範圍ヲ限定シテ被相継人ノ家ニ在ル

者トシ又直至尊屬間ニ於テ人親等ノ最ニ近

キ者ヲ先ニスル事ニ於ニハ固ヨリ既成法典

ノ例ニ従フト墨ニ既成法典ノ如イ直系尊属

ノ男女ノ區別ニ従フ相續姻姓ヲ墨ニシテキ

肯ヲ明手セサルハ聊カ缺點ト謂ハサルベカ

ラサルニ因リ本條第ニ錦ハ特ニ但書ノ規定

ヲ設ケ親等ノ因シキ直系尊属間ニ在リテハ

法典調査會

男ヲ先ニスルヲ肯シ明力ニセリ其他既成法
典ハ直系尊属ノ象旨相續ヲ以テ殊更ニ本人
ノ任意ニ出テシムベキ旨シ明示スト墨ニ是
レ固ヨリ言フツ要セサル所タルベシ

第九百八十八條

(理由) 本條人他人家皆相續人ニ選定スル

場合ニ闇スル規定ニシテ既成法典財産取扱
編中三百五條ト同一ノ趣旨ニ基リト至ニ他

人ヲシテ家督相續ヲ為サシムハ場合ニ於テ
モ亦先ツ被相續人ノ親族及ニ其家ニ多シノ
關係アル者ヲ盡ミタ後ニ至リ他人ニ及キ
スベキヲ以テ至當ト認ムルニ因リ本堂ハ特
スベキヲ以テ至當ト認ムルニ因リ本堂ハ特

法典調査會

一本余第一項ノ規定ヲ設ケテ此趣旨ヲ明カ
ニシテ本題中ニ掲ケル者ノ中ニ家督相續人
タルニキ者ナキ場合ニ於テハ第二項ノ規定
ニ依リ他人ノ中ヨリ家督相續人ヲ選定ハ
キモノト為セリ然レトモ之シ固ヨリ從来ノ
慣例ト族制ノ本旨トヲ斟酌シテ一般ノ順序

ヲ定メタルニ過キサレハ正當ノ事由ノ存入

ルマリテ直チニ他人ヲ遷走スルコトヲ要ス

ル場合ニ於テハ強ヒテ此順席ニ從ハシムベ

キ必要ナキニ因リ本條第三項ハ此場合ニ於
テハ前二項ノ規定ニ拘ハシス裁判所ノ許可
ヲ得テ他人ヲ遷走スルコトヲ得トシテ実

際ノ事情ニ通セシメタ一

第四節 家督相續ノ効力

(理由) 脇成法典ハ家督相續ノ通則中ニ於テ

主トニテ戸主ノ死亡ニ因ル家督相續ノ効力

ニ關スル一般ノ規定ヲ掲クリルニ止マリ憲法、

入夫婚姻又ハ國籍喪失ニ因ル家督相續ノ場

企ニ於テ其効力ニ關シ立法上ノ斟酌ヲ加ヘ
サルベカラサル事処アヘニ拘ハラス況ニ何
等ノ規定ヲ設ケサルハ其缺點ト謂ハサルベ
ナラサルニ因リ本堂ハ特ニ本筋ヲ設ケテ家
督相續ノ効力ニ関スル通則ヲ繕拭シ既成法
典ノ缺點ヲ補充スルト同時ニ編纂ノ財政ヲ
保クシメタリ

法典調査會

第九百八十九條

(理由) 本條ハ既成法典財產取得編第二百九
十四條第一項ヲ修正シテ家督相續ノ一般ノ
効力及ヒ其發生ノ時期ヲ明カナラシムルモ
ノトス蓋レ既成法典ハ被相續人ノ姓氏系統、

貴號等ヲ承継スルヲ以テ家督相續ノ効力ト
為スベキ者ヲ明示スト虽モ斯ノ如ク相續事
項ヲ例示スルコトハ其必要ナク又既成法典
ノ如ク家督相續人ハ一切ノ財產ヲ相續スト
曰フニ止マルトキハ財產權以外ノ権利ハ之
ヲ承継セサンカノ疑フ生セシムルミ足ルヲ
以テ本章ハ寧ロ概括的ニ家督相續人ハ前戸
主ノ有セシ一切ノ権利義務ヲ承継スルヲ以
テ家督相續ノ一般ノ效力トニ権利義務ノ性
質其他隠匿、入夫婚姻又ハ國籍喪失ノ場合ニ
施ケル特別ノ事情ニ因リテノ通則ニ謝レテ
制限ヲ附スベキ事ニ存アハ若本條ニ於テ適

當ノ例外的規定ヲ掲ケタリ

次ニ既成法典ハ家督相續ノ効力發生ノ時期
ニ付キ別ニ規定ヲ設ケヌト虽ニ家督相續ノ
如キ前戸主ノ一切ノ権利義務ヲ他ニ移轉セ
シタル重大ナル事項ハ何時ヨリ此効力ヲ生
セシムルモナナルカラニ明カニ之法得闇原ノ
安國ヲ保クサルベカラフ殊ニ遺産相續ニ付
テハ其承認又ハ抛弃ナルコトヲ認メラル
ニ因リ家督相續ノ効力を云何時ヨリ發生ス
ルモノナルカニ付キ疑ニ生セシムルニ足ル
故ニ本章ハ家督相續ハ相續開始ノ時ヨリ其
効力ヲ生スベキ旨ニ明力ニシニ依リテ左

、疑議ノ移防スルト同時ニ一家ノ間断ナリ
存續ニシテトヲ確保セリ

第九百九十九條

(理由) 水時人冢督相續ノ特權ヲ組成スル權

利ヲ明示スルモノニシテ既成法典財産取得
編制二百九十四條方ニ項ニ多サノ修正ヲ加

ヘタリ即キ既成法典ハ世襲財産ノ承継ヲ以
テ右ノ特權牛ニ加フト至ニ世襲財産ノ承継
ハ一般ノ家督相續ニ付フモノ、別サシハ承
業人之ヲ特別法ニ譲リ又商號又し商標ノ如
キハ必工シテ家督相續ノ特權ニ屬スルモノ
ニ非スシテ每口營業ト共ニ三ツ他ニ譲渡ス

コトヲ得ルモノナレハ本業ハニラ刪削セリ

其他既成法典ニ所謂墓地ヲ改メテ墳墓ト為

シタル所以ハ羣ニ墓地ト曰フトキトモ土地其

モノニ特ニ止ムン力丸リ而シテ此土地ハ

或ハ共有地タルコトアリ或ハ寺領地タルニ

トアリテ必ニ之ニ一家ノ私有地タリニ限ラ

法典調査會

サンク以テ斯一如キ土地其モノノ所方權ハ
家督相續ノ特權ニ屬スルモノニ非サル旨ラ

明カナウシメントスルニ外ナラハ

第九百九十一條

理由 家督相續人ハ一般ノ通ルトシケ前戸

主ノ有セレ一切ノ財産權ヲモ羣衆スルコト

ハナ九百八十九條ノ解釈上更ニ疑ナキ所ニ
シテ既成法典財産取扱即ニ而九十四條ハ
一例ハ時ニ此趣旨ヲ明示入ト虽云此通則ハ
戸主ノ死亡ニ因ル家督相續ノ場合ニ屬し至
當ノ規定シニ拘ハラス隣居又ハ入夫婚姻
ニ因ル家督相續ノ場合ニ對しテハ往々實際

法典調査會

ノ事情ニ適セサル結果ソ生スルニトナシト
セヌ何トナレハ隣居者又ハ入夫婚姻ヲ為ス
女戸主ハ隣居科其他小使費トシテ相當ノ財
産ヲ保有セント欲入ルニトハ其事情故テ然
ムヘキ限キ非サハノミナラス此事ヲシヤ従
未嘗ト行ハレタル凡習ニ屬スルヲ以テ義ニ

隠居又入夫婚姻に因人家督相續ノ場合に
於テ元夫ニ述ナル所ノ通則ヲ適用シテ前戸
主ノ夫セシ一切ノ財産權ハ必ス相續人ニ移
轉スルモノト為スニ於テ人法律干涉ノ適度
ヲ失シ實際ノ事情ニ反ユルニ至シハナリ故
ニ本章ハ既成法律ニ其例ナキニ拘ハラス時
ニ本條ノ規定ヲ設ケ隠居有及ニ入夫婚姻ヲ
為ス女戸主ハ家督譲渡リ為スニ尙ナ多少ノ
財產ヲ留保ミテ自己ノ利益ニ供スルコトヲ
得ベキ旨ノ明カニシ茅九百八十九條ノ通則
ニ附シテ一種ノ例外ヲ掲クト雖モ元ノ留保
ヲ為シム人確証ヲ存セスシテ隨意ニ留保ヲ

為サエリんと於テハ徒ニ紛争ヲ生セエリル
弊ヲ免シサヘルノミナラス即九百八十九條ニ
掲ウシ所ノ家督相續ノ効力ニ闇スル一般ノ
通則ヲ信シテ取引ヲ為スモ三者ハ往々詐欺
ニ陥ルコトナレトセス故ニ本掌ハ隱匿而又
ハ入夫婚姻ヲ為ニ女戸主カ其財産ヲ専保セ
ント欲セハ必ス公正証書其地確定日附アヘ
証書ニ依リ三ノ為サザルベカラストニ在ニ
述ヅル如キ弊害ヲ豫防セリ其他家督相續人
ニ属スヘキ遺留分ハ公私ノ利益ニ基リ特別
ノ制度タルニ因リ隠匿者又ハ入夫婚姻ヲ為
ス女戸主カ其財産ヲ過分ニ留保スルノ餘家

督相續人ノ遺苗シノ言スカウサヘコトハ
更ニ辨明ワ要セサヘソシニカウサヘコトハ
ニ本條但書ノ規定ク設ケ此趣旨ノ明カナリ
シメタリ

第九百九十二條

(理由) 家督相續ニ因リ前戸主ノ有セシ権利

法典調査會

義務ハ相續人ニ移轉ニルヲ以テ一般ノ通則
ト為ス以上ハ爾後前戸主ノ侵權有ハズトク得ル
縁人ニ対シテ辨清ノ請求ヲ為エコトヲ得ル
モ前戸主ニ對シテハ最早侵權ヲ行候入ルコ
トヲ得サヘンツニテ當型ノ事理ト謂ハザルベ
カラズ而シテ戸主ノ死亡ニ因ル家督相續ノ

場会に於テハ此事理ニ從フノ外ナレト虽モ

隠居又ハ女戸主ノ入夫婚姻ニ因ル家督相続
、場会ニ於テハ隠居者又ハ女戸主ノ利益ノ

為人並ニ實際ノ事情ニ通セシムル為メ既ニ

前條ニ於テ此輩ノ者ヲレテ多少其財産ヲ尙
保スルコトヲ得セシメタリニ因リ此場会ニ

於テモ尚ホ事理ニ拘泥シテ前戸主ノ債権者
ハ既ニ家督ヲ譲渡シタル隠居者又ハ女戸主
ニ對シテ辨済ノ請求ヲ為スコトヲ得乙ト為
スニ於テハ債権者ノ利益ヲ害スルコト更ニ
辨明ク要セサルノミナラス隠居又ハ女戸主
ノ入夫婚姻ニ因リ往々債権者ヲ訴害シル弊

ヲ免レサルベシ故ニ本章ハ改或法典ニ其例

ナシト雖モ債權者ノ利益ヲ保護スル為メ特ニ本條ノ規定ヲ設ケ隠居又ハ女戸主ノ入夫婚姻ニ因ル家督相續ノ場合ニ於テハ前戸主ノ債權者ヲシテ尚ホ其前戸主ニ對シテモ辨清ノ請求ヲ為スコトヲ得セシムソニシニ

ミ立ニ依リテ能ク實際ノ事情ニ適乙ルコト

ヲ得ルモノトニ

以上説明スル所ノ特別規定ニ因リ前戸主ノ

債權者ハ其前戸主ニ對シテ辨清ノ請求ヲ為スコトヲ得ルニ於テ人更ニ家督相續人ニ對

シテモ辨清ノ請求ヲ為スコトヲ得ルヤ否ナ

ニ皆キ疑ワ生セニシコトナシトセス歟

トモ前戸主ノ儀權者ナシ而ナ前戸主ニ對し
テ辨済ノ請求ヲ為スエトヲ得ルハ該得ノ特

別保護ヲルニ因リ之ヲ為人ニ家督相^続人ニ對

スル儀權ノ行使ヲ妨ヘキ理由ナキリ以テ
本條ハ將ニ但書ノ規定ヲ設ケルニ述アル如

キ疑ヲ生スルコト勿カラシメリ

第九百九十三條

(理由) 抑ニ國籍ノ喪失ハ本人ノ意思ニ基リ

ト右トノ間ノスニシテ本人ハ自己ニ屬
スル諸種ノ私權ヲモ抛弃セントスルモノニ
非久寧ニリ保有セシト欲スルモノナシム

國籍喪失ニ因ル家督相續ノ場合ニ於テ第
百八十九條ノ通句ニ従ヒ前戸主ノ有セシ權
利義務ヲエテ廬地相續人ニ移轉セシムニ
於テハ實際上ノ必要ナリシテ國籍喪失者ノ
利益ヲ害シ其意恩ニ反スルコト甚シカルヘ
キノニテ又ス既ニ一般ノ通則トシテ外国人
ニモ私權ノ享有ヲ認許シタ人立法ノ本旨ニ抵
触スル嫌ナレトセフ是レ印ナ本筆ノ既成
法典ニ其例ナレト虽モ特ニ本條ニ於テ國籍
喪失ニ因ル家督相續ノ效力ヲ限定シ國籍喪
失者ノ家督相續人ハ戸主權及ニ家督相續ノ
特權ニ屬スル權利ニ限り専地ニシテ承継スル

コトヲ得ルニ止ムル旨ヲ明カニシ其他ノ權利ハ國籍ヲ喪失シタルニ拘ハラス本人ヲレテ尙ホ之ヲ保有セニメ唯我法律ノ下ニ於テ享有スルコトヲ得サルニ至リタル私權ハ適宜ニ之ヲ處分スルユトヲ得セニリし自由ヲ認メタレ所以ニシテ之ニ係リテ法律干涉ノ過度ク保ミシムルモノトス然レトモ右ニ述ガル所ハ單ニ家督相譲ノ性質ニ基リ尙坐ノ致力ヲ示スニ止ムモノナレハ之カ考メニ家督相續人カ法律ノ特別規定ニ因リテ受ノベキ遺留分ヲ承継スルユトヲ妨ケテナレサルハ勿論前戸主力國籍ノ喪失ニ際ニ將ニ家督

相綴人ニ譲渡シタル相綴財産ハ此省ニ於テ
之ヲ承継スルコトヲ得キハ更ニ譲朋ヲ要
セサ人所シルニ因リ本條ハ特ニ相綱ノ規定
ノ設ケテ此趣旨ノ明カナラニメナリ

芽九百九十四條

(理由) 家有相綴人ハ相綴ノ開始ニ因リテ前

法典調査會

戸主ノ権利義務ヲ承継スルワツニテ一般ノ通
則ト為スモ一ナシハ前戸主ノ後権者ハ専後
家有相綴人ニ對シテ辨清ノ請求ヲ為スヘタ
ハ當坐ノ事理ニ屬スト虽モ國籍喪失ニ因ル
家有相綴ノ場合ニ於テハ政ニ前條ニ於テ明
示セハ如ク前戸主ノ全財産ハ専生相綴人ニ

移轉スルモノニ非スにて寧口法律ノ特別規
定ニ因リ又ハ前戸主ノ隨意ノ指定ニ因リ限
定的ニ相續人ニ移轉スルモノナレハ斯ノ如
キ相續人ニ對し前戸主ノ債権有ツシテ其終
債権ノ辨済ヲ請求スルコトヲ得セムルニ
於テハ相續人ニ取リテ既ニ失ニ其利益ヲ害
スハコト少カラサルヘシ故ニ本條ハ國籍喪
失ニ因ル家督相續ノ場合ニ於テハ前戸主ノ
債権者ヲニテ家督相續人力財産ヲ譲受ケタ
ル限受ニ於テノニ此者ニ對ニテ辨済ヲ請求
フ為スコトヲ得セテメ其他ハ國籍喪失者ニ
對ニテ辨済ヲ請求スル者ニハモノニシテ

三、保りテ法律保護ノ公平ヲ保タシムも
ノトス

第九而九十五條

(理由) 本條ノ規定ハ既成法典ニ其例ナレト
雖ニ立法ノ本旨ニ至リテハ既成法典モ亦固
ヨリ本條ノ趣旨ヲ認ムモノニシテ本條ノ

法典調査會

理由ニ付テハ別ニ説明ヲ要セサヘマレ唯如
何ナル権利義務ハ果シテ前項主ノ一身ニ專
屬スルモノナシヤ否ヤ人徳ヒ別レ雖キコ
トアヘマレト虽モ権利義務ノ性質等ニ基テ
通宣ニ至ル則是ムルノ外ナカニマレ

第六章 遺言

(理由) 既或法典ハ遺言ヲ以テ遺贈ヲ為ス方

法ナリト認メ贈與及ニ遺贈ニ關スル取扱編

第十四章ノ下ニ於テ遺言ニ關スル規定ヲ掲

ケタルニ因リ遺贈ニ關セサル遺言例へハ相

續人ヲ指定シ或ハ養子縁組ヲ為シ或ハ後見

人其他後見監督人ヲ指定スル遺言ノ如キハ

法典調査會

如何ナル規定ニ従フベキカニ付キ疑フ生セ

シレルノミナラス遺贈ニ關スル遺言ノミニ

旨テハ特別ノ方式ヲ必要トシ其他ノ遺言ニ

ハ之ヲ要セスト為スカ如キハ固ヨリ其當フ

得ス故ニ本條ハ本章ヲ題して遺言ト云ヒ廣

ク各種ノ遺言ニ通スル規定ヲ掲クルモノニ

シテ遺言ヲ以テ單ニ財産取得ノ一方法ト解カシム力如キ既成法典ノ弊ヲ除キセリ而シテ本末ハ遺言ヲ以テ廣ク養子縁組後見人ノ指定其他寄附行為等ニ闇スル一種ノ法律行為ト認ムニ拘ハラス遺言ニ闇スル規定ヲ以テ相續編中ニ歸入シタル所以ハ遺言ハテ他ニ適當ノ位置ナケレハナリ

第一節 總則

(理由) 既成法典ハ遺言ニ闇シテ別ニ總則ヲ設ケスト雖モ遺言ノ要式行為タルコト、遺言者ノ資格其他遺言ニ依リテ處分スルコトヲ

得ベキ財産部公ニ關スル規定ノ如キハ遺言
ノ通則タルベキヲ以テ本來ハ特ニ本節ヲ設
ケテ此等ノ通則ヲ體括セリ)

第466條

(理由) 本條ハ遺言ノ要式行為タルコトヲ示
スモノナレハ其趣旨ニ於テ固ヨリ疏或法典

ト異ナルユトナシ蓋し遺言ハ本人ノ死後ニ
其効力ヲ生スルモノニシテ後ニ至リニテア
改ムルコトヲ得サルモノナレハ遺言ニ關シ
テハ特ニ錯誤詐欺等ノ豫防スルコトヲ要ス
之し諸國ノ法律ハ厥子皆遺言ニアリテ要式行
為ト為ス所以ニシテ本案モ亦此例ニ從フ也

ノナリト雖モニニノ立法例ノ如ク殊更ニ遺
言ハ必ス本人自ラ之ヲ為スコトヲ要シ其代
理ヲ許サズル規定ヲ掲クルハ不必要ニシテ
此趣旨ハ遺言ノ方式ニ關スル他ノ條文ニ依
リテ自ラ明白ナルヘシ其他遺言ハ本人ノ死
後ニ其効力ヲ生スルモノニシテ斯ノ如キコ
トハ法律ノ明文ヲ待ナテ然ルコトヲ得ルモ
ノナリトノ理論ニ基フキ殊更ニ何人ト雖モ
遺言ヲ為シ得ル旨ヲ明示スル立法例ウカラ
スト雖モ我國ニ於テハ從來ヨリ遺言ナルコ
トハ善ク人ノ知ル所ニシテ之ヲ為シ得ルコ
トニ甘キ取テ疑ヲ生セシムル虞十キニ因リ

本案ハ別ニ遺言ノ権利ニ關スル規定ヲ掲ケ

サルナリ

第千六十七條

(理由) 本條ハ遺言年齢ニ關スル規定ニシテ

既成法典財産取得編第三百五十七條第四號

=修正ヲ加ヘタリ即チ既成法典ハ或年者ニ

法典調査會

非サレハ遺贈ヲ為ス能力ヲ有セスト為スト
離エ遺言ハ法定代理人ト雖モ本人ニ代ヘリテ

之ヲ為スコトヲ得サルモノナシハ遺言年齢

ヲ以テ普通ノ法律行為ニ關スル所年ト同一

ナラシムルハ頗ル不便ナルノミナラス既ニ

養子縁組又ハ婚姻ノ年齢ヲ以テ或年以下ニ

定メタル以上ハ未々成年ニ達セサル者ト雖
モ既ニ養子縁組ヲ為シ或ハ婚姻ヲ為シタル
者ノ如キハ實實際上遺言ノ必要ヲ感スルコト
決シテ六十カラサルベシ殊ニ本案ノ如ク未
或年者ト雖ニ有効ニ法律行為ヲ為ス能力ア
有シ只之ヲ取消スコトヲ得ルニ止ムル以上

法典調査會

ハ遺言年齢ヲ以テ普通ノ成年以下ニ指定ス
ルエ取テ本案ノ立迄例ハ特ニ遺言年齢ヲ指定
ス加之多數ノ立迄例ハ特ニ遺言年齢ヲ指定
スルモノニシテ黃、澳、索、巴等ノ陔典ハ滿十四
年トシ佛國民法ハ滿十六年トシ加那太、紐音
ノ諸法典及獨乙民法ハ滿十八年トシ獨逸書

通法ハ羅馬法ノ例ニ倣フテ男子ハ滿十四年
女子ハ滿十二年ヲ以テ遺言年齡ト為セリ而
シテ男女ノ區別ニ從ヒ遺言年齡ヲ區別スル
コトハ其詮十キニ非スト雖エ細密ニ失シテ
其必要十キニ因リ本案ハ女子ノ婚姻年齡養
子縁組ノ年齡其他諸般ノ事情ヲ斟酌シテ滿
十五年ヲ以テ遺言ニ關スル特別年齡ト為セ
リ
第千六十八條

(理由) 遺言ハ一個ノ法律行為タルニ因リ本
條ノ明文十キ限ハ行為能力ニ關スル總則編
ノ規定ハ當然遺言ニ適用セラレ甚タ不當ノ

結果ヲ生スルニ至ルヘシ是レ即チ本條ニ於
テ右ノ規定中遺言ニ適用スベカラサルモノ
ヲ列舉スル所以ニシテ其理由左ノ如レ

一 第四條ハ未成年者力法律行為ヲ為スニ
ハ法定代理人ノ同意ヲ要スルモノニシテ
遺言ニ付テモ此規定ニ從フコトヲ必要ト

為ストキハ本人ハ隨意ニ遺言ヲ為スコト

ヲ得サル弊ヲ免レサレハナリ

二 第九條ハ禁治產者ノ行為ヲ取消レ得ベ
キ旨ヲ認ムンモノニシテ取消レ得ベキ行
為ハ無能力者ノ代理人又ハ承継人ニ於テ
モ之ヲ取消スコトヲ得ルハ第百二十條第

一項ノ明示スル所ナレハ禁治產者力其本
心ニ復シタル時ニ於テ第千七十九條ノ規

定ニ從ヒ遺言ヲ為シタルニ拘ハラス其代

理人又ハ承継入力之ヲ取消スコトヲ得ル

ニ於テハ禁治產者ト雖モ法定ノ要件ニ從

フ以上ハ遺言ヲ為シ得ルコトヲ認メタル

法典調査會

本案ノ立法ノ本旨ニ牴觸スレハナリ蓋シ

既成法典財產取得編第三百五十七條第二

號ノ如ク禁治產者ハ斷然遺贈ヲ為ス能力

ヲ有セスト為スニ於テハ固ヨリ其代理人

等力遺言ノ取消ス為スコトヲ得レヤ否ヤ

ニ付問題ヲ生セスト雖モ禁治產者ハ心神

喪失ノ情況ニ在ルモノニシテ 即チ時々本
心ニ復スルコトアルモノナレハ此中間時
ニ於テハ有効ニ行為ヲ為スコトヲ駕ヘキ
ノミナラス心神ノ安固ナル間ニ自己ノ死
後處分ヲ為スコトヲ得セシムルコトハ禁
治産者ニ取りテ極メテ必要ナルニ因リ本
案ハ禁治産者ト雖モ一定ノ要件ニ從フ次
上ハ能ク遺言ヲ為シ得ベキコトヲ認ムル
モノナレハ此立法ノ本旨ヲ全カラシメン
トスルニハ禁治産者ノ行為ノ取消シ得ベ
キコトヲ認メタル第ニ條ノ規定ハ之ヲ遺
言ニ適用スルコト勿カラシメサルベカラ

サルハ當然ノ事理タルベシ

三 第十二條ハ準禁治産者ノ行為ニミテ保
佐人ノ同意ヲ得レコトヲ要スルモノヲ規
定スルモノナレハ若シ本條ノ規定ヲ遺言
ニ適用シテ準禁治産者カ遺言ヲ為スニモ
保佐人ノ同意ヲ要セシムルトキハ却テ本

人ノ能力ヲ制限スルニ失シ實際ノ事情ニ
適セサレハナリ蓋シ遺言ニ關スル準禁治
産者ノ能力ニ付テハ諸國ノ立法例頗ル區
々ナリト雖モ多數ノ法典ハ之ヲ認ムルエ
ノニエテ本案ノ如ク禁治産者ト雖モ遺言
ヲ為シ得ルコトヲ認ムルニ於テハ準禁治

産者ニ遺言ノ能力ヲ認ムルコトバ固ヨリ
當然ノ事タルベシ

四 第十四條ハ妻ノ行為ニシテ夫ノ許可ヲ
要スルモノヲ規定スルモノナレハ若シ本
條ノ規定ヲ遺言ニ適用スルトキハ妻力自
由ニ遺言ヲ為スコト能ハサレハナリ殊ニ

法典調査會

遺言ハ死亡ニ因リテ其効力ヲ生スルモノ
ニシテ夫婦關係モ亦死亡ニ因リテ消滅ス
ルモノナレハ妻ト雖モ自由ニ遺言ヲ為ス
コトヲ得セんケルヲ以テ其當ヲ得タムモ
ノトス

第千六十九條

(理由) 本條へ遺言ヲ為ス能力アル者ノ為ニ
タル遺言ハ後ニ至リテ本人カ其能力ヲ失フ
モ敢テ其效力ヲ失フコトナキ旨ヲ明カニス
ルモノニシテ或ハ無用ノ條文タルカ如シト
雖モ實際上ニ於テ人遺言ノ成立時期ト其効
力發生ノ時期トヲ混同シテ遺言ハ本人ノ死
亡ノ時ニ始メテ成立スルモノトン遺言ヲ為
ス時ニ其能力ヲ有スル死亡ノ時ニ能力ヲ有
セサルトキハ遺言ハ無效ナリト解スル少
カラズ故ニ本案ハ多數ノ立法例ニ倣ヒ遺言
者カ遺言ヲ為ス時ニ於テ其能力ヲ有スルコ
トヲ要シ後ニ至リテ之ヲ失フモ遺言ノ效力

ニ何等ノ關係ヲ及ホサドル旨ヲ明ニセリ

第千七十條

(理由) 本條ハ遺言ニ依リテ處分スルコトヲ
得ベキ財產ノ部分ヲ明示スルモノニシテ既
成法典ニハ元ト同様ノ條文ヲ掲ケスト雖モ
其趣旨ニ於テハ既成法典其他多數ノ法典共

ニ認ムル所ト入畢竟遺留分ナルモノハ公私
ノ利益ヲ保護スル為メ法律上特ニ認メラレ
タルモノニシテ被相續人ハ隨意ニ死後處分
ヲ加フルコトヲ得サルモノナレハ遺留分ニ
關スル規定ニ違反セサル限ハ遺言者ハ包括
名義ニ依ルト特定名義ニ依ルトニ關セス隨

意ニ其財産ノ全部又ハ一部ヲ處分スルコト
ヲ得ベキモノトス

第千七十一條

(理由) 本條ハ遺贈ヲ受クル者即ナ受遺者
資格ニ關スル規定ニシテ遺贈ヲ受クル點ニ

於テ昭見ヲ以テ既生現ト見做スコトハ既成

法典其他多數ノ法典ノ共ニ認ムル所十シハ
本葉ハ即ナ第千九百七十二條ノ規定ヲ受遺者
ニ准用シ又第千九百七十三條第ニ號乃至第六
號ニ掲タル所ノ者ハ既ニ遺產相續ヘタルコ
トヲ得サルモノ十レハ遺贈モ亦之ヲ受クル
コト能ハサラシルハ固ヨリ至當ノ事タク

= 因リ第九百七十三條第二號乃至第6號)

規定モ亦之ヲ受遺者ニ準用セリ

第千七十二條

(理由) 本條ハ遺言ニ關シテ後見人ト被後見

人トノ關係ヨリ生スル一種ノ弊害ヲ豫防セ

ントスル趣旨ニ基ワクモノニシテ既成法典

= 其例ナシト雖モ佛國民法其他多數ノ法典
ハ尙木廣キ範圍ニ於テ本條ト同様ノ規定ヲ
掲ケタリ蓋シ後見人ハ被後見人ニ對スル地位ヲ利用シテ私利ヲ營ムコトハ常ニ見ル所
ニシテ法律ハ此弊害ヲ豫防スル為メ後見ニ
關シテ種々ノ規定ヲ設クルモノ十レハ此立

法ノ本旨ヲ全カラシムニハ本條第一項ニ
掲クル如キ被後見人ノ遺言ヲシテ無効タラ
シムルヲ以テ至當トス何トナシハ後見人ハ
自己又ハ其配偶者若クハ直系卑属ノ利益ノ
為メ被後見人ヲシテ適宜ノ遺言ヲ為サシム
ルコトハ甚々容易ニシテ實際上常ニ行ハル
ベキコトタレハナリ而シテ或場合ニ於テハ
後見人カ其位地ヲ利用シタルニ非スシテ被
後見人カ本條ニ掲クル如キ遺言ヲ為スコト
アルベシト雖モ後見人カ其位地ヲ利用シテ
ルヤ否ヤハ極メテ証明シ難キモノナシハ本
案ハ寧ロ本條第一項ノ如キ斷然タル規定ヲ

設ケ此ニ掲クル所ノ被後見人ノ遺言ヲ以テ

無效ト為セリ然レトモ後見人カ既ニ後見ノ

計算ヲ終ハリタシ後ニ於テ前ノ被後見人カ

後見人又ハ其配偶者若クハ直系皇属ノ利益

ノ為メニ為シタル遺言ヲ以テ尙ホ無效タラ

シムル理由ナキヲ以テ本條第一項ハ特ニ但

書ノ規定ヲ設ケテ此趣旨ヲ明カニセリ

後見人カ被後見人ノ直系血族配偶者又ハ兄

弟姉妹又ん場合ニ於テ此等ノ者ノ利益ノ為

メニ為シタル被後見人ノ遺言モ尙ホ且本條

第一項ノ規定ニ從ヒ無效タラシムルニ於テ

ハ干渉ニ失シ人情ニ悖ルノ弊ヲ免レザルベ

レ之し本條第二項ノ規定ヲ設クル可以ニシ
テ本項ノ場合ニ於テハ被後見人ノ遺言ハ其
効力ヲ生スルモノトス然レトモ佛國民既其
他多數ノ立法例ノ如ク醫師僧侶教師看護人
等ノ利益ノ為メニ為シタル遺言エ總テ無効
ト為ス如キハ頗ル細密ニ失じテ適當ノ範圍

ヲ指定シ難キニ因リ本案ハ本條ノ規定ノ範
圍ヲ後見人ト被後見人トノ關係ニ限定セリ

第二節 遺言ノ方式

(理由) 遺言ハ本人ノ死後其効力ヲ生スルモ
ノナレハ遺言ヲ為スニ當リテハ後日ニ至リ
紛争ヲ生シ詐欺ノ行ハレシコトヲ豫防スル

為メ一走ノ方式ニ從フテ遺言ヲ為サレメ殊

ニ之ヲ書面ニ記載シテ確然タル証拠タラシ

ムルコトヲ要ス之し本節ニ於ニ遺言ノ方式

ニ關エル規定ヲ掲クル所故ニシテ其立法ノ

本旨ニ存ラハ既成法典其他多數ノ法典ト異

ナルコトナク又遺言ノ方式ヲ分チテ普通方

式及ニ特別方式ノ二種ト為ス點ニ於テモ既
成法典ノ分類ニ従フモノトス

第一款 普通方式

(理由) 本款ハ既成法典財產取得編第十四章

第四節房一款ニ相當スルモノニシテ既成法

典八單ニ遺言ノ方式ト題ヘト雖モ本款ニ規

定スル方式ハ特別ノ事情ノ存セサル限ハ何人ト雖モ遺言ヲ為スニ當リ通常之ニ從ハサルベカラサルモノニシテ特別ノ場合ニ於ケル遺言ニ關シテ指定セラレタル特別方式ニ對スルモノナレハ本案ハ本款ヲ題シテ明カニ遺言ノ普通方式ト称セリ

第千七十三條

法典調査會

(理由) 本條ハ遺言ノ普通方式ニ三種アルコトヲ示スモノニシテ既或法典財産取得編第三百六十八條第一項ノ字句ヲ修正シタレン過半ス而シテ本案カ特ニ本條但書ノ規定ヲ附加シタル所以ハ本條ノ本則ニ於テ遺言ハ

又ス三種ノ証書中其一ニ依ラサルベカラサ
ル旨ヲ明カニシタルニ因リ如何ナル場合ニ
於テモ此以外ノ方式ニ依リテ遺言ヲ為スコ
トヲ得サルカラ疑ヘシムルニ足レハナリ

第千七十四條

(理由) 本條ハ自筆証書ニ依ル遺言ノ方式ヲ

規定スルモノニシテ其第一項ハ既成法典財
産取得編第三百六十九條ノ字句ヲ修正シタ
ルニ過キス而して本條第二項ハ既成法典コ
其例ナレト雖ニ別ニ自筆ノ遺言書ヲ保管ス
ル官廳ナキ次上ヘ遺言書ノ或跡紙ヲ塗抹シ
又ハ書入其他ノ変更ヲ加フルモ何人カニア

為セシヤハ分明ナラスシテ往ニ糾争ヲ生レ
詐欺ヲ行ハシムルニ足ルベシ故ニ此等ノ弊
害ノ豫防スル方法トシテ本案ハ特ニ本條第
ニ項ノ規定ヲ設ケタルモノニシテ証書其他
一書類ニ加ヘタる変更ノ認証ニ付キ後來普
遍ニ行ハシタル方法ニ從フモノトス

第十七十五條

(理由) 本條ハ公正証書ニ依ル遺言ノ方式ヲ
規定スルモノニシテ既成法典財産取得編第
三百七十條ニ多ナノ修正ヲ加ヘタリ即チ既
或法典ハ立會証人ノ數ヲ二人ト為スト雖エ
後日ニ至リテ效力ヲ生スベキ遺言ニ在リテ

ハ効力發生ノ當時ニ証人カ往々存在セサル
ニトアルヲ以テ遺言ノ記入ハ寧ロ多數十人
ヲ望ムノミナラス既成法典ノ如ク軍ニ証人
二人ノ前ニ於テ云々ト想定スルトキハ二人
以上ノ証人アリシトキハ遺言ヲシテ却テ無
效又ラレシムルカノ疑ヲ生セシムルニ足ルヲ
ノ立會ア要スト改メタリ

以テ本案ハ本條第一號ニ於テ証人二人以上
次ニ既成法典ノ法文ニ依レハ公証人ハ遺言
ノ旨趣ヲ筆記セハ可ナルカ如シト雖モ本案
ハ務メテ遺言者ノ意思表示ヲ其儘ニ証書ニ
記載セシメンコトヲ欲シ本條第三號ニ於テ

公証人ハ遺言者ノ口述ヲ筆記スベキ旨ヲ明

カニセリ而シテ 政或法典ノ如ク公証人カ卑

ニ其筆記シタル所ヲ朗讀スルノミニテ足し

リト為ストキハ尙本遺言書ヲ確實ノモノタ

ラレムルニ足ラサルヲ以テ多數ノ立証例ハ

更ニ筆記ノ本文ヲ遺言者及ニ証人ニ示スフ

トヲ余スルモノナレハ本案モ亦此例ニ倣ヒ

本條第四號ニ於テ遺言者及ニ証人カ公証人

筆記ノ正確ナルコトヲ承認シテ各自署名

捺印スルコトヲ要セリ加之既成法典ハ氏名

ヲ自書スルコト能ハサル者ニモ遺言ノ証人

タルコトヲ許スト雖モ本條ハ遺言書ノ確實

ナランコトヲ期シ証人ハウクトモ自ラ署名
スルコトヲ得ルモノタクコトヲ要し從テ本
條第4號但書ニ於テハ單ニ遺言者カ署名ス
ルニト能ハサル場合ニ付テノミ既成法典ト
同様、便宜法ヲ指定セリ

其他本條第5號エ遺言書ノ確実ナルコトヲ

法典調査會

明白ナラシム為メ多數ノ立法例ニ倣フテ
制定シタルモノニシテ公証人カ單ニ署名捺
印シタルノミニテハ足レリトセス必ス其調
製シタル遺言書ハ法定ノ方式ニ従ヒタル旨
ア附記スルコトヲ要セリ

(理由) 本條ハ秘密証書ニ依ル遺言ノ方式ヲ

規定スルモノニシテ既成法典財産取得編第

三百七十一條ニ相當ス而シテ既成法典ハ証

人ノ數ヲ指定シテ二人ト為スニ拘ハラス本

條第三號ハ証人二人以上ト改メタルハ証據

保存ノ必要上証人ノ多數十人コトヲ許ム趣

法典調査會

旨ニ出ワルコトハ既ニ前條ニ於テ説明セシ

カ如シ既成法典ハ秘密証書ノ筆者ノ何人又

ルカア明示セシメナルハ重要ナル証據方法

ヲ忽カセニスルモノナレハ本條第三號ハ遺

言者カ必ス筆者ノ氏名、住所ヲ申述スルコト

ヲ要シ之ニ依リテ併セテ秘密証書ハ遺言者

之ヲ自書スルト他人カニ之ヲ書スルトヲ問ハ
サルニヨラ明カニセリ

次ニ既或法典ハ其名ヲ自書スルコト能ハサ
ル者ト雖ニ秘密証書ノ証人又シニトヲ得ベ
シト為スラシテ財産取得編第三百七十一條
第四號但書ノ便宜法ヲ設クル必要アリト雖

法典調査會

モ本案ハ既ニ前條ニ於テ説明セシ如ク右ノ
証人ハサクトモ其名ヲ自署スルコトヲ得ん
者タルコトヲ要スル趣旨ニ従フモノナレハ
証人カ其氏名ヲ自署スルコト能ハサル場合
ニ對しテ特ニ便宜法ヲ設クル必要ナシ其他
既或法典ハ公証人カ秘密証書ノ領收書ヲ渡

スベキ旨ノ規定ヲ掲クト雖モ之レ固ヨリ秘

密証書ノ方式ニ關スル事項ニ非サレハ 本案

ハ之ヲ刪除シタリト雖モ秘密証書中ニ空缺

書入其他ノ変更ヲ加ヘタル場合ニ對シ適當

ノ証拠方法ヲ定ムルコトヲ要スルハ敢テ自

筆証書ノ場合ト異ナルコトナキヲ以テ本案

ハ特ニ本條第二項ノ明文ヲ設ケ秘密証書ニ

依ル遺言ニ付テモ第千七十四條第二項ノ規

定ヲ準用スベキモノト為セリ

第千七十七條

(理由) 本條ハ秘密証書ニ依ル遺言力自筆証

書ニ依ル遺言トシテ其效力ヲ保存スベキ場

合ニ闇スルモノニシテ既成法典財産取得編

第三百七十二條ト同一ノ趣旨ニ從フモノナ

レハ別ニ説明ヲ要セス

第千七十八條

(理由) 秘密証書ニ依リテ遺言ヲ為サントス

ル者ハ前條第一項第三號ノ規定ニ因リテ必

要ナル申述ヲ為サザルベカラサルモノニレ

テ既成法典ハ財產取得編第三百七十一條第

一項第三號ノ規定ニ從フモ尚才自己ノ遺言

書タル旨ヲ陳述スルコトヲ要スルニ拘ハラ

ス實際上ニ於テ言語ヲ發スルコト能ハサル

者力秘密証書ニ依リテ遺言ヲ為サントスル

場合ナシトセス之し本條ハ既成法典ニ其例ナレト雖モ多數ノ立法例ニ倣フテ特ニ本條ノ規定ヲ設ケ言語ヲ發スルコト能ハサル者ト雖モ秘密証書ニ依リテ遺言ヲ為シ得ル便利ヲ保タシムモノニシテ其方法ハ即チ本條第一項ニ云ス如ク遺言者ヲニテ其申述スベキ所ヲ遺言書一封紙ニ自書セシムニ在リトス而シテ本條第二項ハ第一項ノ當然ノ結果タルヲ以テ別ニ説明ヲ要セス

第479條

(理由)

既成法典財產取得編第三百五十七條

第二號ハ禁治產者ヲ以テ遺贈ノ能力ヲ有

サル者ト為スト雖モ斯ノ如キ断然々ん規定

ノ不當ナルコトハ既ニ第千六十八條ニ於テ
之ヲ説明セリ故ニ本案ハ禁治産者ト雖モ其
本心ニ復シタル時ニ於テ能ク遺言ヲ為シ得
ルコトヲ認ムルモノニシテ既ニ行為能力ニ
關スル終則編ノ規定ニ於テ心神喪失ノ状況

法典調査會

ニ在ル者ヲシテ自ラ禁治産ノ宣告ヲ請求ス
ルコトヲ得セシメタル立法ノ本旨ト取テ異
ナル所ナキノミナラス遺言ノ如キ死後處分
ハ禁治産者本人ヲシテ其本心ニ復シタル時
ニ之ヲ為サシムルノ必要極メテ大ナリトス
只此場合ニ於テ禁治産者力果シテ本心ニ復

レタル時ニ於テ遺言ヲ為シタルヤ否ヤニ付
キ争テ生セしムルニ足ルヲ次テ法律上此弊
害ヲ豫防スルコトヲ要ス是レ即チ本案ハ禁
治産者力遺言ヲ為ス場合ニ對し特ニ本條ノ
方式ヲ規定スル所以ニシテ其第一項ハ即チ
二人以上ノ醫師ヲ立會ハシメテ禁治產者力
本心ニ復ニタル時ニ遺言ヲ為シタルコトヲ
證明セシメ其第二項ハ右ノ醫師力其証明ヲ
為スニ當リ遵守スベキ方式ヲ指定スルモノ
トス要スルニ禁治產者ノ遺言ノ能力ハ既ニ
本章ノ總則ニ於テ之ヲ認メタルモノニシテ
本條ハ右通則ノ適用ニ關スル特別ノ方式ヲ

規定スルモノナレハ本條ノ規定ニ因リテ醫師ニ入以上ノ立會又ニ之カ為メニ遺言ニ必要十人他ノ証人ノ不必要タラシムモノニ非サルコト實ヲ辯明ヲ要セサル所トス

第十八條

(理由) 本條ハ遺言ノ証人又ハ立會人メニコ

トヲ得サル者ヲ列舉スルモノニシテ既成法典財產取得編第三百七十三條ニ比シ大ニ其範圍ヲ廣メタリ盖し遺言ノ効力ハ証人又ハ立會人ノ証言ニ依リテ定ニシモノタルニ拘ハレス何ズト雖々証人又ハ立會人又ニコトヲ得ケニ於テハ容易ニ詐欺ヲ行ハレ証書ノ

真正ヲ保ケ難キヲ以テ無能力者ヲ始メトシ

テ遺言ニ付キ利害關係ヲ有スル者其他証人
又ハ立會人タル信用ヲ與フンコトヲ得サル
者ノ如キハ遺言ノ記人又ハ立會人タルコト
ヲ得サラシムルヲ次テ至當トス畢竟本條ニ
列舉スル所ノ者モ固ヨリ適宜ノ斟酌ニ依リ

法典調査會

之ヲ定メタルニ外ナレースト雖モ改或法典力
遺言ノ証人タルコトヲ得サル者トシテ除外
セル範圍ハ範圍ハ願ル狹キニ失セルヲ以テ
本案ハ多數ノ立法例ニ倣フテ適當ニ之ヲ擴

張セリ

第481條

(理由) 本條ハ所謂共同遺言ヲ禁スルモノニシテ既成法典財産取得編第三百六十八條第ニ項ノ字句ヲ修正シタルニ過キス蓋ニ共同遺言ハ遺言ノ取消ノ自由ヲ妨クルノミナラス遺言者力共同遺言ヲ為シタル意思ニ付テ種々ノ疑ア生セシムニ因リ多數ノ立法例ハ概不共同遺言ヲ禁シ只夫婦間ニ於テノミ之ヲ許ス一所ノ一二ノ立法例アリト雖天我國ニ於テハ其必要ヲ感セサルニ因リ本案ハ全ノ既成法典ト同一ノ趣旨ニ基ワキ本條ノ規定ヲ存シタリ

第二款 特別方式

(理由) 本款ハ既成法典財産取得編第十四章

第四節第二款ニ相當スルモノニシテ其大體

ニ於テ既成法典ト異ナルコトナシト雖モ既

成法典ノ遺言ノ特別方式ニ依ラシム場合

ハ聊カ制限ニ失し實際ノ事情ニ適セサル所

アルヲ以テ本案ハ此點ニ於テ補充的修正ヲ

加ヘタリ改ニ本款ノ規定ハ既成法典ニ比シ

其條款ノ増減ニ至リタリト雖モ其詳細ハ各

本條ニ就テ之ヲ説明スベシ

第十九十二條

(理由) 本條ハ既成法典ニ其例ナシト雖モ死

亡ノ危急ニ迫リタル者ヲシテ普通方式ニ依

リ遺言ヲ為サシムルコトヲ得サルハ事實上

疑十キ所ニシテ殊ニ我國ノ如ク蒙メ遺言ヲ

為シ置クノ風習未タ行ハレス概不死亡ニ瀕

レテ遺言ヲ為ス者多キ狀態ニ於テハ此場合

ニ對シ簡易ナル遺言ノ特別方式ヲ指定スル

コトヲ要ス是レ即チ本條ハ疾病其他ノ事由

ニ因リ死亡ノ危急ニ迫リタル者ノ為メニ左

ニ説明スル始キ遺言ノ特別方式シ認メタル

所以ニシテ此方式ハ諸種ノ特別方式中最モ

普通一 行ハルモノナレハ本款ノ首條トシ

テ之ニ開スル規定ヲ掲ケタリ

從來普通一 行ハレタル所ニ依レハ臨終ニ際

レ本人カ其最ニ親昵セル者ニ遺言ノ旨趣ヲ

口授スルニ止マルコト多ク又將ニ死亡セん

トスル者ノ遺言ノ如キハ務メテ簡易ノ方式

ニ従ハシケンコトヲ要スルハ實際ノ事情ニ

照ラシテ疑十キノミナラス本人カ未タ遺言

ヲ為サントセサニ拘ハラス他ヨリ其臨終

ヲ推測シテ遺言ニ必要ナル方式ヲ備ヘ本人

ニ對シテ其遺言ヲ求ムルカ如キハ人情ノ許

ササル所ナキニシモ非スト雖モ從來普通ニ

行ハシタル遺言ノ如ク軍ニ或一人ニ甚旨趣

ヲ口授スルモノ之ニ依リテ完全ニ遺言ノ効力

ヲ生スルモノト為スニ於テハ此者カ容易ニ

遺言ノ旨趣ヲ尊重コトヲ得べノ又之ヲ書

面ニ 記載セサルニ於テハ遂ニハ詐欺ヲ説キ

レ紙争フ醜生セシムルノ弊ニ堪ヘサルベシ

故ニ本法ハ從來ノ風習ニ照ラシテ多ナ今日

ノ實際ニ適セサン嫌十キ能ハサルニ拘ハラ

ス疾病其他ノ事由ニ因リ死亡ノ危急ニ迫リ

テ遺言ヲ為サントスル場合ト雖モ証人三人

以上ノ立會ノ上其一人ニ遺言ノ旨趣ヲ口授

レ此者ハ之ヲ筆記シテ遺言者及ヒ他ノ証人

ニ讀聞カセ各証人ハ筆記ノ正確ナルユトヲ

承認シタル後署名捺印スベキモノトシニ

依リテ遺言ノ旨趣ヲ他ヨリ寢更増減スルカ

如キ弊ヲ豫防スルト 同時ニ遺言ノ普通方式

ニ比シテ 一層簡易ナル 特別方式ニ依リ 遺言

ヲ為スコトヲ得セシムルモノトス

以上 説明スル 所ノ簡易ナル 方式ニ依リ 遺言

ヲ為シタル場合ト雖モ斯ノ如キ 遺言ハ尙木

後ニ至リ他ヨリ 異更 増減スル ユト頗ル容易

法典調査會

ニシテ 殊ニ立會ノ証人力共謀シテ 遺言ノ旨

趣ヲ矯ムルカ如キ弊十キヲ保セヌ故ニ本法

ハ此等ノ弊害ヲ豫防シ遺言ノ確實ナランコ

トヲ期スル為メ 其有効條件トシテ更ニ本條

第二項ノ規定ヲ設ケ第一項ノ規定ニ依リテ

為シタル 遺言ト雖モ 遺言ノ日ヨリ二十日内

二 証人ノ一人 右利害關係人ヨリ其確認ヲ裁
判所ニ請求セサルベカラス トニ 裁判所ハ本

條第三項ニ明示スルカ如ク 遺言力 遺言者
眞實ノ意思ニ出テタル心証ヲ得テ始メテ其
確認ヲ與ヘ之ニ依リテ 遺言ノ效力ヲ發生セ
シムル モノト為セリ 且右ニ述フルカ如キ

法典調査會

チ 繕及ヒ 確認請求ノ期限ノ如キハ或ハ今日
ノ實際ニ適セサル 嫌十能ハスト 雖モ遺言
ニ因リテ 後日濫リニ 紛争力生レ 詐欺カ行ハ
ルル 故害ニ比スレハ 敢テ不當ノ立法主義ニ
非サル コトヲ信スルモノナリ

第十八十三條

(理由) 本條ハ既成法典財産取得編第三百七

十六條ト殆ント同一ニシテ其必要ナルコト

ハ別ニ説明ヲ要セス唯既成法典ノ姪ク交通

ヲ遮断セラシタル地方ニ在ル者ト曰フトキ

ハ交通遮断ノ家屋病院等ニ在ル者ヲ包含セ

サルカノ疑フ生セシムルニ足シヲ以テ本法

法典調査會

ハ廣ク交通遮断ノ場所ニ在ル者ト改メタル

ノ外証人ノ教ノ一人以ニトシ既成法典ノ如

ケニヲ一人ニ限定スル力如キ不必要ノ制限

ヲ除キシタルニ過キス

第千八十四條

(理由) 本條ハ既成法典財産取得編第三百七

十四條及ヒ第三百七十五條ヲ合シテ之ニ多
少ノ修正ヲ加ヘヌリト雖ミ其本旨ニ至リテ
ハ全ク既成法典其他多數ノ法典ニ採用セん
立法主義ニ従フモノトス蓋シ軍人及ヒ軍屬
ノ意義ハ陸海軍ニ關スル諸法令ニ照ラレテ
自ラ明白ナルベク斯ノ如キ者ノ為メニ特別
,場合ニ於ケル遺言ニ付キ特ニ簡易ナル方
式ヲ指定スルコトヲ要スルハ固ヨリ論ヲ俟
タサル所ナリト雖モ此特別方式ニ従フコト
ヲ得ベキ軍人又ハ軍屬ヲ指定スルニ當リ既
成法典ノ如ク遠征中ニ在ル者又ハ内地ト雖
モ交戦中ニ在ル者ト言フトキハ遠征ナル用

語ノ意義極メテ不確定ニシテ陸海軍ニ關ス
レ諸法令中ニモ其例ヲ見ス又交戦ナル用語
ハ其意義狭キニ失シテ本法ノ本旨ニ適セサ
ルニ因リ本法ハ此等ノ弊ヲ避ケル為メ廣ク
從軍中ノ軍人軍屬ハ本條ノ特別方式ニ依リ
遺言ヲ為スコトヲ得ト改メタルモノニシテ
從軍ナル用語ハ陸海軍ノ法令上ニ於テ其意
義自ヲ明白ナルベク既成法典ニ所謂合圓中
ニ在ル軍人軍屬ノ如牛モ當然其中ニ包含セ
ラルモノナレハ陸海軍ノ主務者ノ意見ヲ
參酌シテ右ニ述アル力如キ修正ヲ加ヘタリ
次ニ本條第一項ノ場合ニ於ケル立會人ニ付

テハ既成法典財産取得編第三百七十四條ハ
將校一人証人二人ト為スト雖モ軍隊派遣ト
實際上ニ於テハ別ニ將校ナクシテ其相當官
ノミ存スルコトアリ或ハ將校及ヒ相當官ナ
クシテ軍ニ準士官又ハ下士ノミ存スルコト
了リテ既成法典ノ制限的標準ハ實際ノ事情
ニ適セサル場合ヲカラサルニ因リ是レ亦主
務省ノ意見ヲ參酌シテ立會人ノ範圍ヲ擴張
シ將校又ハ相當官ノ一人若クハ此等ノ者ナ
キトキハ準士官又ハ下士一人ノ立會ヲ要ス
トシ又証人ノ數ニ付テハ既成法典ノ如ク二
人ニ限定スル必要ナキヲ以テ之ヲ二人以上

ト改メタリ

本條第二項ハ既成法典財產取得編第三百七
十五條ニ相當スルモノニシテ同條ニ所謂遠
征中、交戦中又ハ合圍中ニ在ル軍人又ハ軍屬
ヲ改メテ軍ニ従軍中ノ軍人又ハ軍屬ト為シ
タル理由ハ既ニ説明セリ而シテ之會人：付
テハ既成法典ハ之ヲ醫官及ヒ軍務官ト為ス
ト雖モ臨時雇入ノ醫士ノ如キハ之ヲ醫官ト
稱スルコトヲ得ス又別ニ事務官十人者存セ
サル場合ナシトセサルニ因リ本法ハ廣ク醫
師ナル用語ニ依リ此者ヲ以テ第一項ニ掲ク
ル所ノ將校又ハ相當官ニ代フルコトヲ得セ

シメ且証人二人以上ノ立會ヲ以テ遺言書ア
作ラレムモノト為セリ

第千八十五條

(理由) 本條ハ(軍中)軍人及ヒ軍屬ノ遺言ニ付口頭ニ依ル特別方式ヲ認ムモノニシテ既成法典ニ其例ナシト雖モ既ニ本款ノ首

法典調査會

條ニ於テ通常人ニ付キ本條ト同様ノ特別方式ヲ認メ實際ノ必要ニ適セシメタルモノナレハ(軍中)軍人及ヒ軍屬ニ付テモ疾病傷痍其他ノ事由ニ因リ死亡ノ危急ニ迫リタル場合ニ於テ口頭ノ遺言ヲ許ス必要アルコトハ固ヨリ論ヲ俟タス故ニ本法ハ主務省ノ意

見ア參照シテ本條ノ規定ヲ設ケタルモノニ
シ立會証人ヲ二人以上ト為シタル所以ハ從
軍中ナルヲ以テカメラ多人数ヲ要セサラシ
メント欲スト雖モ一人ノ証人ニテハ頗ル信
憑ヲ措キ難キニ因ルノミ其他証人ノ為スベ
キ手續ヲ簡易ナラシメタクハ實際ノ事情ヲ
斟酌シタルニ外ナラスト雖モ遺言書ノ壹更
増減ノ豫防シ其確實ヲ保タントスルニハ公
ノ權力ニ依リ之ヲ確認セシムノ必要アル
ニ因リ本條第二項及ヒ第三項ハ第千八十二
條ノ例ニ倣ヒ之ニ適當ノ規定ヲ掲クルモノ
ニシテ裁判所ニ代フルニ理事又ハ主理ヲ以

テレタルハ陸軍ニ於ケル理事及ヒ海軍ニ於
ケル主理ハ即チ裁判官ノ職務ヲ行フモノナ
レハナリ其他確認請求ノ時期ニ付テハ從軍
中ノ者ニ對シ第千八十二條第二項ノ如ク相
當ノ期間ヲ指定シテ遺言書ノ提出ヲ猶要ス
ルコトヲ得サルハ實際ノ事情ニ照ラシテ疑
ニ止メタリ

ナキ所父ルニ因リ本條第二項ハ單ニ遲滯ナ
ク遺言書ヲ提出スルコトヲ要スル旨ヲ示ス

ニ止メタリ

第千八十六條

(理由) 本條ハ既成法典財産取得編第三百七

ナ七條ノ趣旨ニ従フモノニシテ唯其適用ノ

範圍ヲ擴張シタルニ過キス即チ既成法典ハ
軍ニ航海中ニ在ル者ニ對し本條ノ特別方式
ヲ定ムルニ止マルト雖モ航海中ニ在ラスシ
テ現ニ軍艦其他ノ船舶中ニ在ル者ハ其事情
取テ航海中ニ在ル者ト異ナル所ナキヲ以テ
本法ハ廣ク艦船中ニ在ル者ヲシテ本條ノ特
別方式ニ從ヒ遺言書ヲ作ルコトヲ得セシメ
タリ其他立會人ノ範圍ニ付キ多カ修正ヲ加
ヘタリト雖モ其理由ハ既ニ第千八十四條ニ
於テ説明セシ所ト敢テ異ナルコトナキヲ以
テ茲ニ之ヲ略ス

(理由) 本條ハ既成法典ニ其例ナシト雖モ軍

艦其他ノ船舶カ危難ニ遭遇シタル場合ニ於

テハ遭難者ヲ遣言ヲ為スニ付キ第千八十六

條ノ特別方式ニモ從フコトア得サル事情ニ

存スルコトハ別ニ説明ヲ要セサル所ニシテ

既ニ第千八十五條ハ從軍中死亡ニ歛シタル

法典調査會

軍人及ヒ軍属ノ為メニロ頭ニ依レ遣言ノ方

式ヲ認メタル以上ハ艦船ノ危難ニ遭遇シタ

ル者ノ為メニモ亦之ト同様ノ特別方式ヲ認

ムルノ必要ナルコト更ニ説明ヲ要セサル所

トス是レ即ナ本條ハ特ニ艦船遭難ノ場合ニ

於テハ第千八十五條ノ規定ノ準用レロ頭ノ

遺言ヲ為スコトヲ得セシメタル 所以ニシテ
証人其他遺言書確認ノ請求寺ニ閲シテハ既
ニ第千八十五條ニ於テ説明シタルニ因リ茲
ニミテ反復セス

第千八十八條

(理由) 本條ハ既成法典財産取得編第三百七

十九條ノ字句ヲ修正シテ 其意ヲ判明ナラシ
メタルニ止マソモノナレハ 別ニ説明ヲ要セ

ス

第千八十九條

(理由) 第千七十六條第一項ハ 遺言ノ普通方

式中ニ於テ自筆証書ニ依リテ 遺言ヲ為シタ

ル者カ証書ニ塗抹書入其他ノ變更ヲ加ヘタ
ルトキハ其場所ヲ指示シ之ヲ變更シタル旨
ヲ附記シテ皆ニ之ニ署名シ且其變更ノ場所
ニ捺印スルコトヲ要スル旨ヲ明示セんモノ
ニシテ第千七十九條ハ禁治產者カ本心ニ復
シタル時ニ於テ遺言ヲ為スニ必要ナル條件

法典調査會

ヲ規定シ第千八十條ハ遺言ノ証人又ハ立會
人ト焉ルコトヲ得サル者ヲ指定シ其他第千
八十一條ハ二人以上同一ノ証書ヲ以テ遺言
ヲ為スコトヲ禁スル規定ニシテ此等ノ規定
ハ總テ第千八十二條迄至第千八十八條ニ掲
クル所ノ特別方式ニ依ル遺言ニ有テモ必要

ナルニト別ニ説明ヲ要セサル所ナレハ本條
ハ特ニ前述ノ規定ヲ此遺言ニ準用スベキ旨
ヲ示シタルニ過キス

第千九十九條

(理由) 第千八十二條乃至第千八十八條ヘ特
別ノ事情ノ下ニ存スル者ノ為メニ簡易シ

特別方式ニ依リ遺言ヲ為スコトヲ得セシメ
タルモノニシテ遺言ノ確實ヲ保タントスル
立法ノ本旨ニ對し多々推觸スル所アルハ固
ヨリ疑十キ所タルヲ以テ特別方式ニ依ルコ
トヲ得セシメタル原因力消滅ニテ遺言者方
普通方式ニ依リ遺言ヲ為スコトヲ得ルニ至

リタルトキハ先ノ遺言ヲシテ其効力ヲ失ハ

シメ更ニ普通方式ニ依リテ遺言ヲ為し其確

實ヲ保タシムルヲ以テ至當トス改ニ本法ハ

多數ノ立法例ニ倣ヒ特ニ本條ニ於テ特別方

式ニ依リタル遺言ノ有效期間是足メ此遺言

ハ本人カ普通方式ニ依リテ遺言ヲ為スコト

ヲ得ルニ至リタル時ヨリ六ヶ月間生存スル

トキハ其効力ヲ失フベキ旨ヲ明示シタルモ

ノニシテ既成法典ニ此例十キハ其缺點ト謂

フヘシ

第十九十一條

(理由) 本條ハ外國ニ在ル日本人ノ遺言ノ方

式ニ闇スル規定ニシテ其第一項ハ既成法典
財產取得編第三百八十條ノ趣旨ニ從ヒ唯其
字句ヲ修正シタルニ過キス而シテ既成法典
ハ公正証書又ハ秘密証書ニ依ル遺言ヲ為ス
ニハ公証人ノ存スルコトヲ要スルニ因リ外
國ニ在ル日本人ニ對シ此等ノ方式ニ依リテ

遺言ヲ為スコトヲ許サスト雖モ公証人ノ職
務ハ日本ノ領事ヲシテ之ヲ行ハシムルコト
ヲ得ルヲ以テ外國ニ在ル日本人ニ付テモ力
メテ遺言ノ方式ヲ自由ニシ實際ノ便宜ニ適
セシムラクテ至當トス故ニ本法ハ既成法
典ニ其例ナレト雖モ多數ノ立法例ニ倣ヒ特

ニ本條第ニ項ノ規定ヲ設ケ日本ノ領事ノ駐
在スル地ニ在ル日本人ヲコレ公正証書又ハ
秘密証書ニ依リ遺言ヲ為スコトヲ得セシメ
従テ公証人ノ職務ハ領事ヲレテ之ヲ行ハシ
ムベキ旨ヲ明示スルモノニシテ領事ハ人民
保護ノ任ニ當ル者ナシハ右ノ職務ヲ行ハレ
ムルニ付キ其當ヲ得タルモノト謂フベシ其
他既或法典財產取得編第百八十一條ハ其
實質ニ於テ不必要ノチ續タルニ因リ之ヲ刪
除セリ

第十九十二條

(理由) 本條ハ日本ニ在外國人ノ遺言ノ方

式ニ開スル規定ニシテ既成法典財産取得編

第三百八十二條ノ字句ヲ修正シ又ニ過干

サルヲ以テ別ニ説明ヲ要セス